

李氏書翰

自第七号至
第十三号

A4432
106



4433

414
A



114
4432

イ号

七号



一 翰呈上然者拙者共本月十日無滞北京へ到着
 仕候儀ニ兼テノ見込ヨリ一日早ク到着候ニ付
 未タ拙者ノ旅宿定リ居不申儀處幸ニシテ佛僧
 ノ配慮ニヨリコン^神ニ^廟ウト稱へ候寺院ヲ借
 受ケ漸ク安堵致候因テ拙者茫ダウイツド氏及ヒ
 城島氏ト共ニ同所ニ旅宿致辨理大臣ノ御命ニ
 従ヒ勤勉罷在候此段申上候也

千八百七十四年
九月廿五日

テヤールス、ダブルエリゼンドル

答也 事務局

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

大隈重信公

閣下

蕃地事務局

新庄文敬譯

茅八号

去十月十九日日本辦理大臣大久保利通閣
下ノ懇望ニ應シ拝呈イタシ候小子ノ覺書
茅三拾五号同氏ノ指令ニ遵ヒ即チ進呈イ
タシ候也

一千八百七十四年十月一日 ナーレストブリウレヂエンドル

大隈蕃地事務局長官

閣下

蕃地事務局

覽書第三十九号

一千八百六十七年英米臺灣ノ蕃人ヲ征討ス
ル_レト及ビ總理衙門ヨリ日本外務卿ニ呈スル
同治十三年三月二十六日附ノ信書

一千八百六十七年三月米國バルク_船形船ロ_一ワ
山号ノ船數臺灣島ノ南隅ニ於テ「コアル」ツ蕃族
ノ為メニ殺害セラレタリ

今此ノ殺戮ノ音信アリテ當時打狗港内ニ碇泊
セル英國大砲船「コルモラント」ノ指揮官「カピテ
ヤン」官「ブロード」氏同國領事「コルラ」氏ト同伴

シ船夥ノ未タ存命スルモノハ誓查シテ之レヲ
救助センカ為メ一千八百六十七年三月二十五
日臺灣島ノ南岸ニ進行シ翼二十六日同氏ヨリ
ルツ領令ノ近地ニ上陸セシカ偶蕃人ニ銃撃セ
ラレ傷者一人ニ及ビ遂ニ其ノ船艦ニ退キ船艦
ヨリ「コアルツ」人ヲ銃撃シテ大ニ羸捷ヲ奏セリ
一千八百六十七年四月七日「アルレン」氏ヨリ「シオ
ルド」氏ニ呈セルレ一千八百六十七年合衆国交際信
書ヲ見ルベシ

北京劄駐ノ米国公使「ホルリンゲー」ム氏ハ一千

八百六十七年四月廿三日附ノ信書ヲ以テ在厦
門ノ米領事ニ命シ前件ノ舉動ニ付テ英国ノカ
ビ「テヤン」館「ダロ」ド氏及ビ英領事「カルロー」ル
氏ニ其厚意ヲ謝ス可キ旨ヲ述ベタリ曰ク余我
加政府ノ各ニ於テ英国領事其ノ他ニ謝スト
然ルニ「カビ」テヤン「グロ」トド氏及ヒ「カル」ロル氏
ノ舉動ニ付テ清国人不服ノ異論アラハ必ス米
国ノ公使ニ異議ヲ照會スヘキ「ハ」必然ナリ然
ル氏ハ米国公使ニ於モ右両氏ノ舉動ハ万国公
法ニ背反スルト看做シテ敢テ其厚意ヲ謝スル

ニ至ラサルハ勿論ナリ

此ノ一条ニ付テ清国人ガ毫モ駁議ヲ挾ムニ至
ラサルコトハ「ウエー」氏ニ質シテ之レヲ了解ス
ルハ明瞭ナリト虽モ假令之レヲ質スル及バサ
ルモ其後米國海軍ノ「コムマンドル」フエビガル
氏ト臺灣清國領ノ道憲トノ應接或ハ其他四五
月ヲ歷テ台湾清國領ノ道憲米國海軍提督「ベ
ル」氏ニ許可シ「コワル」ツ領ノ灣内ニ放テ「カピ」
「ン」ガ「ド」氏ト同一撤ノ舉動ヲ為サシメタル
事情ヲ参考シ以テ明証ト為スベシ今其ノ「コム

マンドル」フエビガル氏ニ関スル事件ヲ登録セ
ン

一千八百六十七年合衆國海軍卿ノ信書第七八
九葉ニ載録スルコト則チ次ノ如シ

爰ニ「コムマンドル」フエビガル「アシ」子「ロツ」ト
艦ニ乗シ彼ノ紛擾地方ニ進ミ此ノ一条ニ関ス
ルノ事情ヲ委シク質查スベキノ命ヲ受ケタリ
云々同年四月同氏台湾府ニ着シ該島ノ憲官三
人ニ就テ直チニ暴舉ノ一条ヲ穿鑿シ連累ノ蕃
族ヲ縛拿シテ其ノ罪狀ヲ懲責スベキ旨ヲ請ヒ

リ云々蓋シ該島ノ憲官ハ厚ク周旋スベキ旨ヲ
述ベ且必ス質查ヲ遂ケ之レニ関涉セシ人ヲ懲
責セントスルノ勢アリシカ彼ノ犯罪者ヲ携工
来テ之レヲ裁判スルヲ容易ナラサルヲ辨明
シテ毫モ清国ノ法律ヲ遵奉スルヲナク居所定
メナキ漂泊蕃民タル旨ヲ述ベタリ(之レヲ其ノ
原語ニ訳スレハ彼ノ地未タ清国ノ版圖ニ屬セ
スト)

今夫ハ清国政府ハ自国ノ領内ヲ蹂躪セシ主意
ヲ舉ケ「カビテ」サングロ「ド」氏及ビ英国領事ノ

舉動ニ付テ異議ヲ挾ムニ於テハ台湾ノ道憲モ
其旨ヲ奉シ不平ヲ世ニ公布スヘキニ此事ナキ
ヲ以テ異論ナキヲ證スベシ

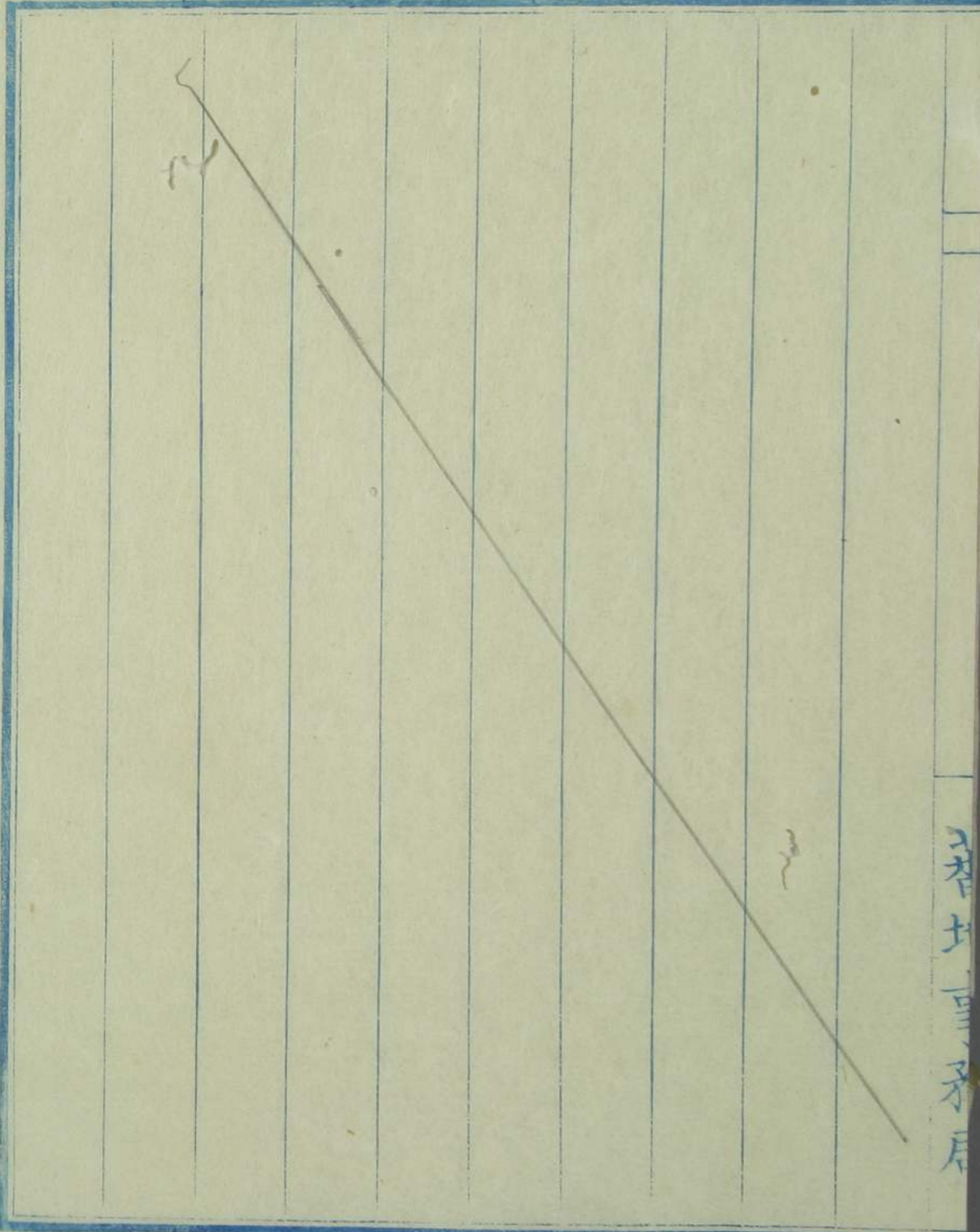
之レヨリ次ニ舉ル所ノモノハ海軍提督「ベル」氏
ニ関スルノ一糸ヲ論セン

一千八百六十七年十二月二日合衆国海軍御ヨ
リ大統領ニ呈スル文書第八葉ニ曰ク海軍少將
「ベル」氏ハ此ノ大罪(乃チ其ノ国人ノ殺戮)ヲ罰ス
ルヲナク手ヲ空フシテ置ク可~~キ~~理~~ナキ~~以~~テ~~
決~~セ~~非~~ス~~故ニ「ロ」ワ「ル」船艙ヲ殺害セル

蕃族ノ土地ハ顛クハ之レヲ破壊センカ為メ同
年六月「ハルトフオールド」及「ワイルド」ノ兩艦
ヲ携工上海港ヲ開帆セリ

前文ニ記スル如リ今若シ清国政府「カピテ」
ンブロード」氏ノ征討ニ對シ之レニ異議ヲ挾ハ
「アレハ北京在苗ノ英国公使ハ必ス台湾割駐
ノ英領事「カルロル」氏ニ右ノ一條ヲ報告スベシ
然ル氏ハ同氏軍兵ヲ携工重子テ土蕃ノ領内ニ
到リ万国公法ニ背反シ其ノ過罪ヲ招カサルヤ
ウ注意スベシ然ルニ海軍提督「ル」氏ノ打狗港

ニ采着スルニ當テ英領事「カルロル」氏ハ此ノ征
討ニ從事スベキ許可ヲ願望セシ旨ハ前文既ニ
引書セル一十八百六十七年合衆国海軍御信書
第八葉ニ登錄セルヲ以テ明証トス曰ク海軍提
督「ル」氏打狗港ニ采着セル氏「ル」氏云
々「テイヤ」氏云々其ノ他此ノ征討ニ從事セン
「フ」切望スル英国領事「ヤールレスカ」氏
ハ各々提督ノ艦中ニ到レリト



英領事「カルロル」氏其他同侶ノ徒今此ノ征討ニ從事シ
 テ果シテ何事ヲ做セシヤ其情狀ハ上陸隊指揮官
 ノ報告ニテ明瞭ナリ曰ク台湾島打狗割駐ノ英
 領事及同所存留ノ英國人「テイラー」及「ピクケリン」ノ西
 氏ハ民兵トナリ此ハ征討ニ從事シ通例軍前ニ
 立テ大ニ尽力セリ(前文ニ引書セル一千八百六十七年合衆國海
 軍卿信書中第五八葉「コマシドルベルクナツプ」ノ報告第廿八葉ニ在リ)
 同年六月十三日當艦海岸ヲ距ル羊英里内ニ碇泊シ士官
 水吹航海者ヲ候ヤ其数百八十一人上陸シ云蓋シ此ノ分派隊
 ハ百方蕃族ヲ搜索シテ午後二時ニ至リ更ニ一隻ノ船影ヲ看ズ

此ノ時暫ラバ休息セン^トヲ思ヒ暫ラク休息セン際ニ蕃族密
カニ襲撃シ此ノ隊ノ目^レヲ斃セリ^リリウテナントコムマンドル官
マクケン^シ云々重傷ヲ受ケ之レヲ運送スルニ及ビ途ニシテ先亡
セリ云云蓋シ此ノ度ノ戦闘ニ由リ船中ノ士官其他水夫^等至
ルマデ多ク酷烈ノ炎暑ヲ経験シ云々而シテ^テコムマンドルベル^等
^フハ其ノ船艦ニ退陣セン事ヲ決セリ

然ル所以ノモノハ曾テ陸戦ニ習熟セサル水兵ヲ以陸
上ニ戦ハシメ此ノ経験ニ及フ云々ハ初テ水兵ノ陸戦ニ無益ナル^ト
シ此困難ニヨリテ能ク知ル足ルモノトシ武切ヲ奏スル^{コト}ナント然モ軍
卒ノ尽カセ^シトハ十分ニシテ他ノ兵ニ取^リテ所ナレ氏唯陸戦

ハ水兵ニ適セサル^中故ナリ蓋シ此配慮ヲ勘考ス
ルニ其従卒ノ困難セル情状ニ由リ海軍提督^ハベ
ル氏ハ後未重^クテ此ノ地ニ兵軍ヲ上陸セシム
ル能ハサル旨ヲ決セリ(前文ニ引ク一千八
百六十七年海軍卿信書第八九葉ニ詳ナリ)
此ノ一条ニ於テハ海軍提督^ハベル氏ハ毫モ指
令ヲ受ルコトナク自カラ專斷セシ處置ト云
フモノアリト雖トモ之レヲ信憑スルニ堪
ヘタルモノニ非ス其故何ントナレハ曾
テ一千八百六十七年頃ハ吾不利加ト日本

或ハ清國ノ間々ニ電モ電信ノ往復アルナク又
 現今上海積滯及ビ慕方西斯哥ノ間現ニ往
 復スル如キ常例ノ郵船ナク且信書ヲ合衆
 國ニ往復スルハ九月四ケ月ニ及フコト
 是レ其ノ第一証ニシテ又合衆國^政府ハ
 往復ノ夕メニ海軍提督ノ空シク
 遷延シテ機會ヲ失センコトヲ洞知ス
 ルカ故ニ海軍提督ベル氏ニ命シテ自カラ之レ
 ヲ擔當セシメ爾來ハ特令ヲ待タズ蓋ケニ
 之レヲ処置スヘキ旨ヲ述ベ報告ニ及ビタリ

是レ則チ海軍提督台灣征討ノ報告ニ於テ寸分
 ノ異ナリナキガ如シ蓋シ一千八百六十七年六
 月十九日附ノ海軍卿ニ呈スル書翰ヲ以テ明証
 トス其ノ抜萃尤ノ如シ
 昨年六月三日附ノ報告才四十六号ニ遵據シ昨
 年三月亞船「ローロ」号ノ役負及ビ其船影ヲ殺害セ
 シ台湾東南隅ニ占居セル蕃族ノ地ハ瀕テク之
 ヲ破壊セシガ為同月七日「ハルト」フォルドレ艦ニ乘シ
 イオミン艦ヲ携ヘ上海ヲ開帆セシテ譯テ之ヲ貴局
 ニ奏達セン前文ニ引ク一千八百六十七年海軍卿信書

才五十四葉ニ詳ナリ)

今夫レ海軍提督ハ前文ノ書翰ニ関スル報告ニ
一致シテ其ノ処置ヲ為セシヤ否ヤ之レ疑團ノ
由テ起ル以所シナリ然ルニ若シ海軍卿彼ノ海
軍提督ハ其ノ指令ヲ破テ專断セルト思エルナ
ラバ必スヤ其ノ旨ヲ大統領ニ傳報セシナルベ
シト虫氏海軍卿ハ毫モ其旨ヲ陳言セシトナク
實ニソノ報告ニハ此ノ度海軍提督ハ豫ヲ見テ
悉皆ソノ洞察スル所ヲ為セシト云ヒソノ指令
ニ遵テ處置シソノ舉動明瞭ナル旨ヲ証明セリ

(前文ノ八葉三形ヨリニ形ニ詳ナリ)

前條載録スル夏款ノ他今又夏ニ收擧スベキ條件
アリ蓋シ海軍提督ベル氏ハ尋常ノ指令ニ遵シテ
台湾蕃地ニ尽力セシ際合衆國外務卿ニオールド
氏一千八百六十七年六月附ノ書翰ヲ以テ同國政
府ノ意見ヲ北京割駐ノ合衆國公使ニ報告セリ
ソノ旨趣ハ一千八百六十七年ヲヨビハ年
ノ交際往復書才四百九十八葉ニ詳ナリ乃
千九二於ルカ如シ

夫レ蕃族ノ暴擧ニ及ビシ地方ニ於テ清國ハ

多ニ地方政府ヲ設立スルヤ不ロヤ清國果ニ其
 政府ヲ設立スルニ於テハ之レヲ審査セシメ且之
 レヲ罰スルニ須ラク償金ヲ要スル莫ハ曾テ指令
 スル如ナリ然ルニ又一時之レヲ支配スヘキ政府
 ナキニ於テハ之レヲ懲責シ重テ暴挙ナカラシメン為
 其方法如何ヲ推挙スベシト曰ク若シ臺灣ノ
 蕃地ニ於テ一時之レヲ支配スベキモノナキニ於
 テハ該島ハ則チ世界ノ一大國ナルカ故ニ必ス政府ヲ設立セシ
 ムルヲ要シ其方法ハ北京駐ル米公使^{ハリスン}氏之レヲ如分スニキ指令アリ
 蓋シ清國於テ該島政府ヲ設クル昔セザハ外國規準ニ從テ受テ國ヲ建設スル如ク法

曾テ政治家ノ聞エアル國務卿^卿シオルド^卿氏ヨリ公
 使^{ハリスン}氏ニ送達セル指令書第四節
 ニ明瞭ナルカ故ニ公使^{ハリスン}氏ハ万國
 公法ニ照會シテ之レヲ推挙スルモ何ノ妨ケカ
 之アラシ
 指令書第四節ニ去フ情状ハ何レノ事ト雖モ合
 衆國ハ臺灣或ハ其ノ部ヲ掠奪シテ毫モ之レヲ
 押領スルノ望ミナキハ曾テ貴下ノ承諾スル如
 ナリト
 海軍提督^{ハリスン}氏ハ豫メ前文同一撤ノ指令ヲ覽

知シ此ノ意義ト符合レテ竊カニ詔ラク臺灣蕃
族ハ規律ナキ國ニ屬スル羊関ノ人之レヲ領ス
ルカ故ニ此ノ地ヲ擔當スル國ヨリシテ之レヲ
能ク治メルニ非スニガ毫モ之レヲ懲責シ或ハ
之レヲ保護スルヲナキカ如シト遂ニ此ノ地ニ
穩脚地ヲ有セル清國ハ之レヲ擔當スルノ允適
ナル國ト看做シ以テ清國ニ之レヲ報告セリ故
ニ一千八百六十七年六月十九日附一書ヲ合衆
國海軍卿ニ奏進セリ曰ク破船人ヲ暴殺セシ蕃
族ヲ懲責スルニ堪タルモノハ多年武力ヲ以テ

其ノ管領ト共ニ此ノ蕃族ヲ保護スル清國ノ任
ナリ蓋シ之レヲ清國ニ責ムルハ北京劄駐米公
使ノ權ヲ以テスヘシト(前文ニ引ク)一千八百六
十七年合衆國海軍卿信書第五十五葉ニ詳ナリ
夫レ海軍提督ハ此氏ノ奏進セシ建議ハ大統領
之レヲ一覽シテ其ノ趣ヲ兼諾シテ一千八百六
十七年八月二十三日國務卿ハオールド氏此ノ趣
旨ヲ北京劄駐ノ米公使ニ指令セリ曰ク貴下在
北京ノ歐洲各國公使ト高議シ之レトカヲ合セ
事情行レ易キ勢ナレバ海軍提督ハ此氏ノ建

議セシ良策ヲ以テ専ラ清國ノ政府ニ逼ルベ
レ是レ大統領ノ祈望スル処ナリト(一千八百
六十七年合衆國支際信書第一冊第五十葉ヲ
見ルベシ)

然レ清國政府ハ固ヨリコレ氏ノ建議ニ左祖ス
ルノコトナク却テ同治十三年第五月廿六日附ヲ
以テ總理衙門ヨリ日本ノ外務卿ニ一書ヲ送レ
リ其ノ文左ノ如シ

夫レ臺灣ハ遙渺タル海中ノ一島ニシテ我レ更
ニ法律ヲ設ケテ未タ島中ノ蕃族ヲ制限スルコ

トナク又之レヲ管理スルノ政府ヲ設立スルコトナ
レト又同書中ニ總理衙門ヨリ寺島氏ニ報告シ
テ云ラク曾テ日本大使ハ日本臺灣蕃族ヲ征討
セントスルノ意思ヲ彼ノ衙門ニ通達シテ清國
ト日本ノ間ハ其ノ交誼ヲ厚フセルヲ以テ今爰
ニ懸惑ヲ生ト雖モ直ニ兩國之レヲ氷解スベ
シト云エリト蓋シ清國人ハ日本人其ノ勞ニ報
子ヘキノ目標ナリ徒ニ臺灣蕃人ヲ鎮靜シテ
自國ノ良善ナル人物ヲ害シ又其ノ國財ヲ盡
スト配慮スルニ堪タルヤ否ヤ蓋シ之レヲ配

八号
慮スルヲナキカ如シ然ラハ清國人ハ何ヲ以テ
之レニ報ユルト配慮セルヤ必ス其ノ平定ノ地
ヲ日本帝國ノ版圖ニ偏入スルカ或ハ右一挙ノ
費額ヲ償フニ足ル可キ償金ヲ要求スルカ倒
在右兩條ニ及ニテ此レ疑團ノ歸スル所ナリ
一千八百七十四年九月十九日北京ニ於テ之
レヲ書ス

日本欽差辦理大臣大久保利通殿

閣下

チャールレスドブリウレゲエントル判

第九号

一 翰呈上然者ドリトルメンソン氏日本政府ノ
命ニ因リ厦門ニ於テ買入タル馬及ニ其他ノ家
獸ヲ同氏再ニ之レヲ権限外ニ於テ賣却致シ損
失ヲ醸セシ一件ニ付同氏蕃地事務局ニ於テ申
立候請求ニ付別帝メンソン氏兄弟ト拙者トノ
間ノ往復書翰ノ寫シ差上候間御一覽可被下
候
右メンソン氏兄弟ハ英國人ニテジョーソン氏ト

蕃地事務局

共ニ廈門ニ於テ醫師シヨリン並メンソント連
名ヲ以テ医業ヲ営ミ頗フル名望アリ拙者モ經
檢致シ其醫術ニ長シタルハ存居候然ル処同氏
等ハ在廈門日本領事館附ノ医官タラシテヲ懇
望致居候ニ付外務卿閣下ノ命ニ因テ廈門在留
大日本帝國政府ノ領事ヨリ指示ノ約定ヲ以テ
同氏同館へ撰任之儀閣下へ相願立申ヘク旨約
定仕候以テ

北京

千八百七十四年

十月五日

テヤールレス、ダブルユリゼントル

第九号書翰ノ別紙第一号

他日拙者愚弟一糸ニ付貴君ト御相談ノ儀並愚
弟ノ性急ヨリ生シ候事トハ申ナカラ急迫ノ事
ニテ損失金ヲ生シ恢復ノ目途無覚束一糸ニ付
先便委細愚弟方へ申送り候然ル處右ハ愚弟一
人ニ関シ候儀ニモ無之拙者並ジヨリン氏ニ相
係リ候事ニ有之且若シ臺灣一糸ニ付日本人ノ
為メニ事ヲ行フアテバ、ジヨリン及ヒメンソ
ン共社ヲシテ永ク税関ノ医官タルヲ許サ、ル

ベキ旨支那人ヨリ慥カニ愚弟へ被申付候由如
此ク拙者共職業ニ付障碍有之候故右ノ一条方
今ニテハ至極難儀ノ次第ニ有之候且又前件ノ
一条ニ付愚弟ノ所置ハ世人ヨリ之レヲ見ル時
ハ甚タ不都合ニ被思候得共全ク私利ヲ計リ候
様ナル儀決シテ無之段ハ拙者信用スル処ニ有
之候是等ノ事今更辨解候モ無益ニ候得共定テ
貴君世人ノ言フ處ヲ御信用被成候儀ト存候ニ
付一應申上候愚弟ヨリモ貴君へ書状差上候様
申遣シ置候

他日貴君廈門ニ御滞在ノ節拙者共在廈門日本
領事館附属ノ醫官ニ御推挙有之度旨御依頼申
度所存ニ御座候處其砌ハ貴下ノ御焦慮多端ナ
ル旨兼知致居候ニ付貴君へ御面倒相掛ケ不申
罷在候何分此一件ニ於テハ貴下ノ御好意ヲ以
御周旋被下候義偏ニ奉願候以上

八月三十日

ダウイツドメンソン

ゼ子ラルリゼンドル貴下

新庄文政譯

第九号書翰別紙第二号

去ル八月三十日附ノ貴翰致落手候過日厦門ニ
 於テ御相談ニ及候折去ル四月足下ノ賢弟御求
 購相成候家獸之儀今又御賣拂ニ相成被及損耗
 候蒙其償日本政府ニ御申立有之候儀拙者ノ見
 込ニ於テハ公道ヲ以テ論スルモ又法律ヲ以テ
 論スルモ賢弟ニ於テハ毫モ伸冤被成候道理之
 一無キ趣申演候蒙猶又其事ニ付云々御申越相
 成賢弟ハ豫テ御引受ノ儀御断相成候趣且拙者

ノ所望ニ應シ御買収相成候家獸御賣拂有之候
ハデハ不相濟等ノ趣電報ヲ以テ拙者工御報告
相成候得ハ則チ「エールス」社中ニ申送り賢弟ノ
恣マ、ニ賣却被成候品ハ鬼毛角毛足下ノ御都
合ニ任セ同社中ニテ引受サセ可申然レハ賢弟
ノ買収被成候代價ノ同額ヲ以テ拙者買戻シ可
申候處豈計シヤ賢弟ハ之レヲ糶賣ニテ賣捌キ
相當ノ儀ト被思^又シ「エールス」社中工賣拂ノ御
望無之候ニ付テハ「エールス」社中ニ於テ右家獸
預吳候様御示談被下候得バ同社ヨリ拙者工掛

合次第又々拙者買入可申候處更ニ其義モ無
之ニ付拙者其旨更ニ難解候
右ニ付相考ヘ候處賢弟ノ御所行ハ全ク支那
人ノ賞譽ヲ得シガ為メニシテ拙者ノ事業ヲ
障碍シ又拙者ニ夥多ノ損失ヲ被ラシムベキ
御所為ナルハ更ニ疑ヒナク候然レハ若シ
拙者此御所行ヲ賞シ其損耗ヲ償ヒ候ハ、向
後同様ノ事出来致其救助ヲ被求候節モ其助
ケヲ為サ、ルヲ得ス也レ不都合ノ先例ヲ始
ルノ儀ニ有之候右ノ儀必竟賢弟ニ於テ日

本征討ノ事業ヲ補助スルヲ支那人ヨリ禁
制セラレシニヨリ俄カニ其方向ヲ失却致
サレテノ儀ニ相違無シト推察致候若シ又
仮令其儀ニ無シトモ拙者買入ルベク必要
致居候家獸ヲハ一ノ報知モナク僅カ十一
時間ニ賣却被致拙者ニ損害ヲ被為被候段
ハ全ク賢弟ノ性急ナル御所為ヨリ出来候儀ニ
付拙者ニ於テハ決シテ寛宥致シガタク猶又此外
賢弟ノ御所行ニ付拙者七八百弗ヲ損耗ヲ生シ
居候併シ賢弟ニハ拙者一個ノ為メニ務メラレ

候御思慮ニテ返テ拙者日本政府ニ對シ拙者ノ
朋友ノ過誤ニ因リ其罪拙者ノ身ニ擔當セサル
ヲ得サルヲ等ノ儀ハ御承知ナキ故ト存シ堪忍
致居候
右等紛紜ノ儀ハ置キ兼テ貴下御依頼有之候厦
門在苗日本領事館附屬医官へ御推察可申儀委
細承知致候
右ノ趣本日申立否回答有之次第早々吉報可申
進候貴下賢弟へモ宜敷御傳聲所希候也

北京
千八百七十二年九月廿九日
千ヤールスダブルユリセンドル

蕃地事務局

ドクトルメンソン貴下

新庄交敬譯

新庄交敬譯

二号

五月廿二日附ノ貴書ヲ正ニ落掌ス予書中ニ記
載スル所ヲ見テ少シク憂ヘ且我國ノ公使異論
ヲ生スルヲ歎セリ去レ共予ノ見ル所ニテハ異
論ヲ生スルモ何等ノ莫モアル可カラス
四五日前ニ予大統領ヲ尋問セシ時恰モ大統領
出立セントセル時ナリシカ予公使ノ所業ヲ告
ケシカハ大統領公使ヨリ請取リタル書簡ヲ予
ニ示シ讀マシメタリ其後テ兩日ヲ經テ予大統
領ニ我國ノ公使ノ所業及々予ノ見込ヲ書シテ
送レリ其略左ノ如シ

第一條 數年前ニ我國ヨリ兵ヲ臺灣ニ送リシ
ハ今日本ニテ兵此島ニ送ルト同旨趣ニテ蕃人
ノ克暴ヲ懲ラン為メナリ云々

又云ク 目今日本國旗ヲ立テ為ス所ノ支那ヲ我
國モ支那ノ保護ヲ受ケス亦我國旗ヲ立テ為セ
リ云々

又云ク 漂流船ヲ扶助スル人民臺灣ノ東南海
岸ヲ領スレハ年々益アリ故ニ日本人勝利ヲ得
我國モ共ニ其益ヲ受ケンヲ望ム之レ支那ニ
テ日本ニ先タチ此舉ナキヲ以テナリ云々

又云ク レゼンドル氏ワツソン氏カツセル氏
ノ日本要府ノ為ニ用ヲナスハ我國我國旗ヲ立
テ支那ヲ臺嶋ニ為セシニ比スレハ局外ヲ犯スト
セヌ云々

第二條 若シ我國ニテ我國ノ士官ヲ日本國ノ
為メニ用ヲ為スヲ允シ而シテ日本國ニテ國ノ
義務トシテ國民ヲ保護スル為メ國民ニ暴害ヲ
加ヘタル者ヲ懲ラスヲ以テ支那ト戦争ニ至ラ
ハ我士官ノ日本ノ為メニ用ヲナス期限ヲ定ム
ルトモ我國日本ニ對シ好意ヲ失フニアラス云

々
第三條 局外干犯ハ曲サニ論ス可キニアラス
之レニ干スルニ十四章按スルニ或ハ万国ニ於テ論スル各國ノ為ス所局外干犯ヲ強ク論セス而シテ此法ニ拠テセザラシムルレゼンドル此ヲ禁阻スルハ無益ノ莫ニテ日本ヲ輕慢スルニ至ラサルモ目今歐洲ノ學術ヲ研窮シ開化ヲ進ムル此特出ノ人民ノ銳意ヲ折ルナリ而シテ我海軍士官ハ都テ云フ我國人ノ支那ヲ感動セシメシ各莫ク日本全國ノ人知ラサル者ナシト云

々
又云ク 我國乱ノ際ニ英國士官我國ニ至リ我聯邦ニ加ハルヲ我國ニテ禁セス而シテ「アテバ」マ船隻件ヨリ生セル議論ニ我國ニテ此英國士官ノ所業ヲ論セカリシ云々
第三條 原言ハ條約ニ我國船ノ日本人ヲ臺嶋ニ運送スルヲ禁スルハ日本ト支那戰爭ニ至ル乎或ハ又支那ニテ臺嶋ノ克暴蕃人ヲ懲シ而シテ臺嶋ノ東南海岸ヲ永世領シ蕃人ノ克暴ヲ禁スル後チ「ア」ラオレハ予ハ其理ナシト思ヘリ之レ其東南海

岸ハ諸船北東風ニ吹レテ屢漂着スル地ナルヲ
以テナリ

予又ゼ子ラールバフコック氏ニ書ヲ送り大統
領ノ此度ノ夏件ヲ注目シ我國ノ公使ノ干典ス
ルヲ禁止センヲ頼ミタリ

予一兩日ノ中ニ決議ヲ聽ク可シ左スレハ早
速足下ニ報知ス可シ

我輩ハ都テ健康ナリ足下^再見ルヲ樂シム大統
領都テ日本ヲ苦シムル如キ各夏ヲ改正ス可シ
之レ予少シモ疑ヲナサス頻首謹言

千八百七十四年七月七日ワシントン府
海軍省中測量局ニ於テ

タニールオンメン

ゼ子ラールバフコック君

二号附録

密書

予アモイニ於テ受ケタル如クカビテイシカッセ
ル氏捕拿セラレントノ恐レアルヲ察シ閣下ニ
ワシントン海軍省中測量局ノ長コモドールオ
ンメンヨツテ予ニ送レル秘密ノ書簡ノ寫ヲ呈
ス同氏ハ予ノ頼ニ依テ三月二十三日ニカビテ
インカッセル氏ニ他行ヲ許可セシ人トシ而シテ
書簡ハ同氏ヨリ臺灣ニ於テ日本ノ行為ニ干典
スルフィク氏ニ注目セル大統領ニ呈セル書中緊
要ノ條ヲ掲出シテ予ニ送典セルヲタルハ此

寫ヲ見テ知リ賜フ可シ

コモドールオンメン氏ハカヒテイシカツセル氏
ヲ捕拿ス可キヲラハ其令ヲ下ス可キ職掌ノ人
ナリ而シテ七月七日迄ハ当地ニ在ル船隊ヲ指揮
スルアトミラルニ此令ヲ下タサルノ証予ニ
送レル書簡ニ於テ明白タリ且ツ同氏ハ海軍省
中ノ高官ニテ其位直チニ海軍卿ニ次ク且ツ目
今ノ海軍卿ハ文学家ニテ海軍ノ支務ヲ知ラザ
ル故ニ唯政体上ノ支務而已專断シ其他海軍ノ
支務ハ都テ同氏ニ委任シ各支相謀ラザルナ

シ且ツ同氏ハ目今ノ大統領ト同学ノ親シミア
ル故ニ交リ厚ク相見ヤルノ日稀ナリ

日本ト合衆國トノ條約ニ背クトナク日本ニ仕
ヘル米人ヲ日本支那兩國在留ノ公使ノ苦シメ
ルヨリ日本ニ諸種ノ不都合ヲ生セシムルヲ
指示シ寺島君目下ワシントンニ在テ日本ノ為
メニ利ヲ謀ル予ノ友人ノ方向ヲ固カラシムル
為メニ予ノアモイニ於テ捕拿ノヲ以テ所置
アラントヲ望ム

閣下コモドールオンメン氏ヨリ予ニ送レル書

簡ヲ見ラレナハ同氏大統領ト相謀ル決未ヲ報
知ス可シト去ヘルヲ知ル可シ然レ共今ニ至ル
迄其報知ナシ之レ其書簡失ハレタルニアラザ
レハ未タ其決未ニ至ラザル故ナル可シ若シ
其書簡失ハレタルニアラザルハ恐ラクハ此キ
ニ請取ル可シ然ルキハ速カニ閣下ノ貴覽ニ備
フ可シ頓首

千八百七十四年十月五日北京ニ於テ

チャールズ・ウレゼンドル

大隈閣下ニ呈ス

第十号

余謹ンテ九月十九日ノ貴翰ヲ落手シ予カ著ハ
セシ主蕃地ハ支那ノ一部ナリヤト題スル小冊
子ヲ世ニ公ケニ為セシヲ閣下ノ許容シ給ヘル
旨ヲ承知シテ大ニ満足セリ借閣下ハ凡ソ何事
ニ限ラス日本政府管係ノ事柄ハ予カ聞知次第
詳細ニ之ヲ閣下ニ上申ス可キノ指令ヲ為シ給
ヘルニ付キ予今謹ンテ申ス予ハ方今大久保氏
ト總理衙門トノ間ニ於ケル談判ニ直カニ管係
セスシテ其談判ノ様子ハ大久保氏ノ口上ニテ
之ヲ聞知リ或ハ同氏ノ書記官メル吉原氏ヨリ

之ヲ聞知リタレハ若シ之ヲ書面ニ記シテ閣下
ニ上申スル時ハ必ス誤謬ヲ免レサルノ恐アリ
故ニ此回ノ重大事件ニ付テノ詳細ノ模様ハ并
理大臣ノ書簡ニ就キ之ヲ見給ハンコトヲ乞フ
抑当地ニ於テル予カ景況ハ頗ル困難ヲ極メ且
ツ自カラ思フニ予カ嘗テ東京ヲ忖リシ頃預思
セシ如ク日本受府ノ為メニ益ヲ為スコト能ハサ
ル可シ

嘗テ予カ福建地方官ヘノ特別辨務使ノ職ヲ任
マラレシ時ノ予カ景況ハ其後ノ景況トハ全ク

異ナリテ閣下ノ知リ給フ如ク固ト予ハ支那南
方ノ地ニ於テ頗ル権カアレ朋友二名アリテ此
朋友二名ハ日支西國間ノ和議ヲ勸ムルニ励勉
シタリ諸其朋友中一名ハ廈門ノ道台ニシテ又
一名ハ福建ノ高官ニ在リテ当令福州府ニ住ス
ルウン、フエーナリ蓋シ此二名ハ共ニ滿州人ニ
シテ皇帝ノ親族ナルカ就中ウン、フエーハ嘗テ
インクエイ(亦予カ友ナリ)カ福建浙江二省ノ總
督ヲ勤メシ頃三年間福州府ニ於テチヤンクン
即チ陸軍都督及ヒ會計監督官ノ職ヲ勤メタリ

又右インクエイハ福州ニ於ケル其職ヲ忝リシ
後進級シテ北京兵部尚書ノ職ニ任シ其後更ニ
進シテ吏部尚書兼備急兵總督ノ職(此職ハ受府
第三等ノ高官ナリ)ニ任セシカ蓋シ此最終ノ轉
任ハ予カ北京到着ノ後ニ在リテ右ウシフエー
及ヒインクエイノ西氏ハ嘗テ予カ廈門在苗米
國領事ノ職ニ在リシ頃其公務ニ付キ屢々予カ
思ヲ被リタレハ苗モ人タル者ハ其恩誼ヲ忘ル
可カラス然ルニ此ニ名ハ果シテ予カ恩誼ヲ忘
ルハトナツ予カ人ト成リ正直ニシテ且ツ其職

任ニ適セルトヲ信スルノ証ヲ示シ且ツ予カ思
フ所ニテハイインクエイモウシフエート同シク
西國間ノ和議破レサルヲ冀望セリ
故ニ予カ福州ニ赴ク趣旨ハ明白ニシテ予ハ該
地ニ於テウシフエート面會シ當時支那ノ海岸
防禦不行届ナル旨ト一朝外國ト交戦ヲ宣告セ
ハ必ス帝國中到ル處頓ニ騷乱ヲ生シテ之レカ
為メ清朝ノ危キ旨トヲ同氏ニ説キ然ル上ニテ
同人ヨリインクエイニ其理ヲ説諭セシメハイ
インクエイハ前文ニモ言ヒシ如ク固ト和ヲ欲ス

ル人ナレハ右ノ論理ヲ以テ皇帝ノ義官ニ説キ
柳原氏ノカヲ添ユ可シ但シ柳原氏ハ予カ知ル
ル所ニテハ北京受府ニ向ヒ程好キ要需ヲ為ス
ニ付キ予ニ助カスルノ命ヲ受ケタリ
然ルニ予カ南支那到着ノ後直チニ此面計ヲ執
行フヲ妨ケシ模様ハ閣下ノ之ヲ承知シ給ヘル
如クニシテ其後大久保大臣全權ヲ委セラレテ
北京ニ来リ總理衙門ハ己ムヲ得ス一切談判ヲ
引受ケタレハ是レ近地方官ニ其談判ヲ引受ク
ルノ權アリシモ此ニ至テ全ク其權ヲ失ヒタル

ニ因リ予カ上海ニ於テ釋放ヲ得タル後福州ニ
至ルモ最早無益ニ属スルニ至レリ
予カ上海ニ於テ大久保氏ニ面会セシ時同氏ヨ
リ予ニ告ケタルニ米國ノ代理公使ノ予カ逮捕
ニ逢ヒシ事柄ヲ辨解セサル間ハ予北京ニ於テ
予カ支那ノ朋友インクニイ氏及ヒ外國公使輩
ニ向ヒ半バ官命ヲ蒙レル状態ヲ以テ應接ヲ為
シ能ハサルカ故ニ柳原氏ヨリ米國代理公使ニ
掛合ヒ其辨解ヲ為サシムヘキ旨ヲ大久保氏ヨ
リ柳原氏ニ指令シ又大久保氏ハ予カ逮捕ノ事

ニ付キ柳原氏トウイレルレムス氏トノ談判済マ
サル間ニ予カ北京ニ在ル時ハ予カ景况頗ル困
難ヲ極ムヘキヲ虞慮シ予カ上海出立ノ期ヲ一
週間遅延シ其間ニ右ノ一事ヲ全ク了決スヘキ
旨ヲ告ケタリ

然ルニ予北京到着ノ後聞キタルニ柳原氏ノ説ハ米
國代理公使別段ノ約束ナク予ヲ釋放シ嘗テ予ヲ逮捕
シタルノ律法ニ反キタルヲ黙許シタルニ因リ更ニ其事ヲ
米國公使ニ掛合フ時ハ徒ラニ其恨ミヲ招キ又縱令然ラサル
モ其意ヲ損フ然ル時ハ右公使北京ニ於テ大久保大臣ノ

處置ヲ妨ク可キノ恐アリヘキカ故ニ右ノ事ニ付キ掛合ヒテ
為サスト蓋シ此説ハ頗ル其理アリテ且大久保氏モ之ヲ聽認
シタレハ予敢テ異論ヲ申立テスト虽モ予カ嘗テ福州ニ
派遣セラレシ指令ノ趣ト其後予カ職務上ノ主目ノ変ヒニ趣
トテ總理衙門ニ報告スヘキ旨ヲ申立テシニ柳原氏復タ之ヲ諾セス
シテ是迄外務省ニ於テハ地方官ニ宛テ派遣セル委員選任ノ旨ヲ
大政府ニ報^上シタル例ナシト云ヘリ然ルニ今甲國ト乙國トノ接際恰モ
甲屋ノ持主ト乙屋ノ持主トノ接際ニ同シク若シ甲屋ノ持主ヨリ用向
アリテ其家僕一名ヲ乙屋ノ家僕ニ派遣スルニ當リ其趣旨ヲ乙屋ノ
持主ニ告知マサル時ハ大ニ禮ヲ破ル所置ト云フヘク又之ト同シク

甲国ノ政府ヨリ用向アリテ其臣民一名乙國ノ臣民ニ定テ派遣スル時ハ
必ス其趣旨乙國政府ニ報告ス可キ理ナリ因テ予ハ日本政府ノ予ニ福州
ニ於テ勤ヘキ旨ヲ任セシ職務ノ趣旨支那政府
ニ報告スルノ當然タルヘキヲ論シタリ然レモ
辨理大臣ノ重大事件ニ付キ辛勞セル時ニ當リ
予カ一身ニ係ハレル事ニ付キ爭ヲ生シテ大臣
ヲ煩ハスヲ欲セサレハ予右ノ一事ヲ固執シテ
論辨スルヲ止メ精々尽カシテ大久保氏ノ為メ
ニ用達ヲ為サント決シタリ是レ實ニ大久保ノ
高官ナルト其材智ノ秀絶ナルトヲ尊ミ且ツ予

カ一身ニ取リテ同氏ヲ敬愛スルノ情アルニ出ツ
去月十九日予カ大久保氏ニ贈リシ第三十五号
覺書ハ既ニ閣下ニ呈セシカ本月八日子數時間
大久保氏ト面談シ同氏ヨリ丁寧ニ其北京到着
以來ノ處置ヲ詳カニ予ニ告ケ且ツ至急予カ見
込書ヲ差^出スヘキヲ予ニ令シタレハ予其翌日
別紙第一号封書第三十六号覺書ヲ同氏ニ呈シ
タリ借本月十日ノ朝大久保氏ヨリ総理衙門ニ
一書ヲ贈リシカ其書ハ予未タ之ヲ見スト雖モ
談判手切レノ書面タリト思ヘリ又當日予ハ佛

國公使マルクイ、ド、ジヨフロワ氏ニ面會セシカ同
氏ハ日支兩國間ノ和親ヲ保持スル機會ヲ窺ヒ
欣然トシテ之カ為メ尽カスヘシト云ヘリ蓋シ
予カ思ヘルニ同氏ハ其真情ヲ吐キ且ツ日本ヲ
助クルノ意アルヲ知リタレハ予同氏ノ好意ヲ
謝シ且ツ之ニ答テ曰ク佛國ノ東洋ニ於ケル管
係ハ格別大ナラサレハ同氏ノ方今日支兩國間
ノ紛紜ヲ穩カニ鎮定セシムヘキ地位ニ在ルハ
予カ一身ニ取リテ愉快ナル所ニシテ且ツ右紛
紜ニ付テノ同氏ノ説ハ全ク公平ニシテ正大公

明ノ道ニ適ヒタレハ大久保ノ説ト符合シ依テ
是レ迄應接ノ時総理衙門ノ述ヘタル支那政府
ノ説トハ違フヘキイヲ信スト

其兩三日前ニ予米國代理公使ウイルレムスト面
會セシカ當時同氏ヨリ予ニ告クルニ日支兩國間
ノ和親ヲ保持スルニ尽カスヘキ旨ヲ以テセリ然
レ氏同氏ハ二三回程支那ヲ具負スルノ証ヲ示シ其
願フ所ヲ現ニ執行フヘキ機會アリシヲ聞知ス
ルハ予カ大ニ慨歎スル所ナリ

英國公使ウエード氏ハソル、ヘレ、パークスト其

意ヲ同ウシタルハ初メノ程ハ予等ニ抗スル意ヲ懷キ
シ見ユ然レ氏別紙第二号第三号封書ニ就キ之ヲ見
ル時ハ同氏ノ近頃大ニ其意ヲ変シタルヲ知ルヘシ
魯西亜及ヒ日耳曼公使ハ大久保氏ノ北京到着
ノ後間モナクモンゴリアニ赴キシカ魯國公使ハ日
支兩國間ニ交戦ノ始マルヲ憂ヘス其戦ニヨリ支那全國
ノ乱レテ其機ヲ窺ヒ魯國ノ西亜細亞ニ版圖ヲ擴ムル便
ヲ得ント望メリ然レ氏予ハ魯國公使ノ日本ニ同意
スヘキヲ思ヒシカ予カ天津滯留中寓居セシ魯
國總領事ノ家ニ於テ聞知セシトコロ

ニ因リ更ニ予カ説ヲ確定セリ儲予カ北京ニ向ヒ出立
セントセシ日右總領事ニ暇ヲ告グルニ臨ミ其妻ニ向ヒ何ナ
ノ氏北京ニ於テ用テ達スヘク何ソ北京ニテ買求メ送ルヘ品
ハアクスヤト問ヒシニ其妻予ニ答ヘテ日本兵ノ北攻^東取^東時
最初砲彈ヲ以テ打落スヘキ碑石ヲ送リ給ハン^一ヲ
乞フト云ヘリ又予本日一時間餘ブツツラウ氏
ト會話セシカ同氏ハ少シモ支那ト同意スルノ証ナシ
又字國ハ日文西國間ニ戦争アル時之ニ注目スルノ
趣旨大ニ魯國ト異リト虽モ前文魯國ニ就キ記セ
シ説ハ亦字國ニ適當スルヲ得可ク又予カ思フ所

ニテハ幸國ハ全ク其交戦ニ于涉セサル可シ加
之方今大久保氏ノ尽力ニ因リ日本ハ決シテ戦
ヲ好ムニ非ス支那ニ於テ方今ノ談判中平和ヲ
欲スルノ意ヲ示スアテハ日本ハ欣然トシテ
戦ヲ未然ニ止ムヘキヲ衆庶ノ普ク知ル所トナ
リ且ツ若シ愈々兵ヲ構スルニ至ルハ日本ノ趣
意ハ決シテ土地ヲ攻畧スル非ス唯其國ノ權利
ト譽名トヲ保持スルニ在レハ爾後ノ成行ハ日
本ノ其責ニ任スヘキニ非ス支那ノ其責ニ任ス
ヘキヲ亦普ク衆庶ノ知ル所トナリタレハ西洋

各國中一トシテ敢テ日支兩國間ノ戦争ニ干涉
スル者ナシト言フ氏事實ヲ誤ツ論ニハ非ヤル
可シ猶又ウエード氏ハ現ニ日支兩國間ニ戦ノ
始マルアテラハ英國ハ已ムヲ得ス之ニ干涉ス
ヘキ由ヲピットマン氏ニ告ケ(別紙封書第二号)
タリト虽モ是レ又矢張予カ意見ヲ確定ス可ク
若シ英國ノ實ニ此ノ如キ處置ヲ為スニ決シタ
リセハウエード氏ハ其嘗テピットマン氏ニ告
ケタル如キ瓊ホナル道理ヲ以テ其處置ヲ定ム
ルノ所以ト為サ、ル可キナリ愚クニウエード

氏、其本國受府ニ電報シテ嚴ニ中立ノ法ヲ遵
守スヘキヲ答テ受ケシナル可ク若シ然ラサル
時ハ斯ク頓ニ其様子ヲ變スルノ理ナシ又ウエ
ード氏ヨリ^{ビロ}ットマン氏ニ告クルニ福州府ニ
於ケル六百萬テイルノ金高借入ノ事ハ大受府
之ヲ允許セル旨ヲ以テセシハ北京受府ノ交戦
ノ意ヲ棄テ日本ヨリ程好ク之ニ迫リ論スル時
ハ日本ノ需要ニ從フヘキ旨ヲ示スニ足ルヘク
故ニ右ウエード氏ノ報告ハ日本ヲ助クル者ノ
言説ナリト思做スヲ得可シ

兵事ニ付テハ嘗テ予カ閣下ニ呈セシ書翰ニ記
セシ外今亦別ニ閣下ニ上申スヘキ事寡ナク李
鴻章カ北河ノ兩岸ニ築キシ寨營ノ如キモ日本
受府愈北支那ノ地方ヲ以テ戦地ト定ムル時ハ
其背面ニ廻ルヲ容易ナレハ左程恐ルハニ足ラ
スト思フ所ナリ然レ氏北支那ハ寒冷甚シク侵
攻ノ兵之レカ為メ大ニ困難スヘキニ因リ北支
那ヲ以テ戦地ト定ムルハ誤リニシテ加之北支
那ニ於テハ天津ニ支那最良ノ兵二万人北京近
傍ニ四万五千人ヲ備ヘタレハ日本兵其地方ニ

進ム時、其兵ニ出逢フノ患アリ(ピットマン氏
ノ報告書別紙第四号封書ヲ見ルヘシ但シ予カ
説トピットマン氏ノ説トハ全ク符合セズ而シテ
北京政府其京城ヲ防禦スル為メ右最良ノ兵ノ
必要ナリト思フ間、之ヲ北京ニ止メ置ク可ク
然ル時ハ寒冷ノ氣候トナリ後道路惡シクシテ
兵士之ニ往來スルニ難ハサルカ故ニ支那政府
右ノ兵ヲ南方ニ遣ル能ハサル可シ
予思ヘテク南支那ハ冬ニ於テハ日本兵ヲ用フ
ル為メ更ニ便利ナル地方ニシテ其地ハ豊饒ニ

テ人口多ク且兵ノ為メ必要ナル物ハ凡ソ何品
ニ限ラス備ハラサルナク殊ニ氣候ハ甚ク寒カ
ラスシテ又其防禦ノ策モ行届カズ其地ニ在ル
兵ニノ兵ハ新ニ募リシ生兵ニ過キズ其兵器軍
装ハ共ニ粗惡ニシテ六ヶ月以下ニシテ能ク整
頓シ得ヘキニ非ズ且ツ予カ確思スル所ニテハ
其兵ハ如何ナル事アリ氏恐ラクハ戦ハサル可
シ備又今ヲ去ル數年前ヨリ南支那ニ定備兵ノ
アラサルヲハ千八百七十年ニ福建浙江兩省ノ
總督タリシインクワイノ勅命ニ答フル文ヲ以

テ其証ト為ス可ク當時支那人ハ將ニ佛蘭西ト
戦ノ起ラントスルヲ思ヒ居タリシカ右イソク
エイノ答文ニ記セル景状ニ至テシメシ原曰ハ
千八百七十年ヨリ今ニ至ル迄交易セサルカ故
ニ方今ニ於テモ其景状ハ亦敢テ當時ト異ナラ
サル可シ蓋シ右答文(其写一通ヲ別添トシテ閣
下ニ呈ス)ノ真正ナルハ予之ヲ保証シ得可クシ
テ此答文ノ書ハ千八百七十年ニ予カ買収セシ
者ニ係リ又予ハ此書ト共ニ當時支那ノ地方官
吏中或者外國人ノ支那全國ニ在ル河井ニ毒ヲ

派スヘキ策ヲ施スノ風説ヲ傳布セシメタル旨
ヲ示セル書類ヲ買収セリ而メ斯ク外國人ヲ謗
讒スル論説ハ恐ラクハ各國公使ヨリ公ケニ之
ヲ支那受府ニ論スルノ理アル可シト虽モ予ハ
米國政府ニ乞フテ斯ク公ケニ論スルヲナカラ
シマルヲ得タレハ前文ニ記シタル如クイソク
エイ及ヒウソフエーノ二名ト予カ懇親ナルニ
至リシ原曰ハ全ク此一事ニ在ルモノトス
夫レハ措措キ日本兵支那南方ニ於テ一戦ニ勝
ヲ得ハ廣東福建中央ノ諸省甚臺灣等ニテ一揆

到ル処蜂起シ來春ニ至ラハ北京ノ兵之ヲ防ク
ニ勞シ日本兵ト戦フ為メ南方ニ赴クヲ考フル
ノ暇ナカル可シ然ル時日本ノ將帥善ク意ヲ用
ヒテ敢テ支那人ニ向ヒ戦ヒテ為スニ非ス其政
府ニ向ヒ戦ヒテ為スニ在ル旨ヲ其人民ニ説諭
シ而シテ支那人民ヲ妨害セサル時ハ日本ノ為メ
大益アル和議ノ條約ヲ方今ノ政府ト結フカ若
シ然ラサレハ支那憂國党ノ勝兵方今ノ政府ヲ
亡シテ新タニ設クヘキ受府ト之ヲ結ヒ得可キ
ト必然タリ而シテ之レカ為メニハ若シ已ムヲ得

ス交戦ヲ布告スルニ至ラハ日本皇帝陛下ノ政
府支那人ノ解シ易キ支那文ノ布告ヲ出タシ日
本ノ支那ト交戦スル意ハ支那人民ヲ苦メンカ
為メニアラス唯各人深ク惡ム所ノ滿清ノ朝ヲ
亡ホサンカ為メナル旨ヲ告ク可ク然ル時ハ支
那人ノ中ニ内訌ヲ醸スルト必定ニシテ之レカ為
メ日本ハ支那トノ戦ヒニ付キ其目的ヲ成就ス
ルニ重大ナル助ケヲ得ヘキト猶其兵ノ勝ヲ得
タルト同シカル可シ
予ハ速カニ此書ヲ閣下ニ呈シ且下日ニシテ支

那人ヨリ聞知ス可キ事柄ト大久保氏ノ談判手
切レ書ノ成果トヲ追テ閣下ニ上申セントス謹
言

千八百七十四年十月廿日
北京ニ於テ

チャイルス、ウ、レゼンドル

蕃地事務總裁

大隈重信閣下

覺書第三十六号

別帝第一号并ニ
書翰第十号

第一

凡ソ戦ヲ宣告スルニ先タチ戦争スル所以
ヲ局外者ニ示スハ上古ヨリ以来ノ常例タ
ル事

凡ソ戦ノ一事ハ事實止ムヲ得ザルニ出レカ或
ハ真ノ権利ニ基カザレハ之ヲ義トナスベカラ
ス國政ヲ執ル者是理ヲ知ラザレハ則チ正道ヲ
壞リ而メ君主ノ心中道理ノ公ナル者無クシテ

之ニ代ヘレニ私欲ヲ以テシ而ノ人民ノ安寧幸
福ノ如キハ君主ノ玩弄物トナリ遂ニ永ク是人
間界ヲ去レベシ蓋シ上古以來凡ソ戦争ハ其正
不正ヲ問ハズ端ヲ癸スレノ國実ニ兵ヲ交ユル
トキハ則チ遍ク天下ニ告テ其戦争スレ所以ノ
理ヲ知ラシムルモ其実ハ兵事ヲ慎ムヨリ起レ
ルナリ蓋シ書経卷之四恭摯上ハ武王ノ討ヲ代
ツトキ其臣下ニ告ケルニ開戦ノ所以ヲ以スル
ニ過キザルノミ是レ実ニ耶蘇紀元年前千百二
十一年ノ事ナリ降テ近代ニ至テモ其例行ハレ

タリ即チ千七百五十四年フランスノ王ノホン
ガリーノ女帝マリアセーレルサニ戦ヲ挑マント
決セシトキモ亦開戦ノ趣意書ヲ作リテエヲロ
ツパノ諸國ノ政府ニ送リメリ又千八百零五年
ゼルマニール帝ノナホレラン第一世ニ戦ヲ宣セ
シトキモ亦趣意書ヲ作リテ開戦スル所以ノ情
実ヲ述ヘタリ又其開戦原ト受事ノ都合ニ起ル
トモ其開戦ヲ強テ美トスルタメニ不本意ナレ
議論ヲ立テ趣意書ヲ出タスヘシ及令ハ千七百
五十四年イギリスフランスノ間ニ起リシ戦争

ノ如キハイギリスニテハ曰クフランス人ノニ
ウアルゴジアノ境界ヲ侵シ且ツ兇暴ノ所業ア
リシヲ故ニ止ムヲ得スシテ此挙ニ至ルナリト
然ルニ其真意ハ是時ニ当リテフランス人海上
ニ在テ大ニ威權ヲ得タルニ由リイギリス人之
ヲ嫉惡シテ之ヲ挫カントマルアリシナリ又近
頃フランスとプロシヤトノ間ノ戦争ノ如キハ
何ノタメニ之ヲ發セシヤト其由来ヲ尋ヌルニ
是時ニ当リフランス國ニ淺論紛起シテメホレ
オン自ラ之ヲ制スルヲ能ハス又之ヲシテ荏苒

增長セシムトキハ其身ヲ込ボシ又其朝ヲ込ホ
スニ至ルモ知ルヘカラス依テ其議論ヲ静メン
カタメニ戦争ヲ始メシナリ然レバ其世帯ニ告
ルノ道理ハ全ク其本意ト異ナレリ是ハ世人ノ
皆知ル所ニシテ今更ニ贅言スルヲ待タス

凡ソ戦争スルニ何ヲ以テ正シキ原因トナス
ルヤノ論

左ニ挙クル所ノモノハ其正シキ原因トナス
第一凡ソ國其根本タルノ權利ヲ破ラレ、事

第二、他國ノ兵力ヲ以テ己ノ國ノ領地ヲ侵カサ
レ或ハ其一部ヲ侵カサル、事
第三、物ノ次序ト人ノ權利ハ人間ニ於テ之ヲ守
ラナルヘカラサルモノナリ然ルニ之ヲ破ラント
ノ舉アル事(アロンソセリス氏ノ万国公法會典
第五百十六節ニ出ツ)

○
日本ノ支那ニ於ケル開戦ノ理アルヤノ
論

問テ曰ク支那ハ何等ノ形状ヲ為シ又何等ノ所

業ヲ為シテ日本ヲシテ開戦ノ名義ヲ得セシメ
タレヤ

此問題ニ答ヘントセハ兩國不和ノ原因ヲ尋
サレベカラス

○
兩國不知^和ノ原因ノ大畧

千八百七十一年十二月十九日(即チ同治十年二
月八日)琉球ノ日本人五十四名カノ蕃地ノ一人
種牡丹人ノタメニ殺害セラレタリ其後又難船
ノ日本人此人種ノタメニ妨害ヲ受ケタリ

日本ノ受府ニテハ此事ヲ聞テ大ニ憂ヒタリ蓋
シ是レヨリ先キ日本政府ニテハ箱館ト玩球嶋
トノ間ニ飛脚船ヲ設ケタルニヨリ或ハ其水手
ノ臺灣ノ海岸ニ吹流ケサル、トアリテ兇暴ノ
所業ニ遇ハント懸念セシ故ナリ

是ニ於テ地理書ノ憑拠トスベキモノヲ検査ス
ルニ臺灣島ハ分レテ二部トナリ西方ノ一部ハ
即チ支那~~等~~ノ住居スルモノアリ東方ノ一部ハ
即チ蕃民~~之~~ニ住居シテ其地ニ在テ獨立不羈
ノ權アリトス其外諸種ノ書付ヲ見ルニ皆

支那人ノ是蕃民ヲ管理セサルヲ證スルニ足レ

又此蕃民ハアメリカノ土人ノ如ク兇居野処ス
ルモノニアラス又漂民ヲ殘害スルノ風俗ハモ
ト外國人ヲ惡ムヨリ起ルナリ而メ外國人ヲ惡
ムノ念日々甚シキハ即チ支那人ノ此ニ來ル者
蕃民ヲ虐使スルニ由ルナリ然ルニ支那政府ニ
テハ千六百八十三年即チ康熙三十年ヨリ今日
ニ至ルマテ是弊害ヲ除カントスルノ策ナキ是
レ又顯然ト知ラレタリ

又公文類ニ於ルニ蕃民ハ支那ヨリノ待遇ノ善
カラザルヲ怒リ支那トノ交通ハ辞シテ之ヲ清
ケズ但シ時ニ因リ別國ノ名ヲ以テ來ル者アレ
ハ之ト契約ヲ結ビタリ即チ千八百六十七年及
ヒ千八百六十七年ノ合衆國カノ漂民守護ノタ
メ南部ノ諸人種ト契約ヲ結ビタリ
日本受府ニテモアメリカ人同様ニ其人民ヲ保
護セントタメニ牡丹人種ニ使ヲ送リタリ爰ニア
メリカ人ノ經驗ニ於ルニ此使ヲ送ル趣意ヲ遂
ケントスルニハ大軍ヲ以テ此使者ニ隨行セシ

メ以テ勢ヲ張リ日本ノ名ヲ以テ土人ニ和親ヲ
辞ヲ告ケザルベカラストス 依テ其説ニ從
ハント決セリ然ルニ日本ノ軍勢ノ上陸セン
トスル頃ハ其嶋中文那ノ居留地ニ接シタルヲ
以テ支那受府ニ禮儀ヲ尽クシ北京在留日
本全權ヲ經テ其事ヲ通達シタク而シテ
實ニ此通達ヲ為シタル事ト云ニ支那政府此舉
ヲ故障セザリシ事ハ同治十三年三月二十六日
即チ千八百七十四年五月十一日總理衙門ヨリ
日本ノ外務卿ニ送リタル書翰ノ中ニ公然ト記

シタリ

上ニ言ヘル如ク臺灣ニ使ヲ送レリ但シ其部
督ヨリ名湾篤込込ニ到着ノ趣キヲ支那
地方官ニ報告シ猶ホ名湾ニ到着ノ趣キ
モ之ニ報告シ且ツ之ニ示シテ曰クタトビ
大軍ヲ率ヒ来ルトモ其意ハ別ニ在ルニアラス
只使者ヲ保護シテ其仁蒸ノ業ヲ助ケルニ過キ
ナルノコト且ツ之ニ請テ曰ク願ハクハ支那地
方官ノカヲ合セテ我レヲ助ケンイフト是時支
那地方官ハ同意シ其島ノ海岸ニ在ル支那人ヲ

シテ日本人ヲ助ケシメタリ爰ニ福建ノ總督ハ
臺灣ニ在ル支那領ヲ管轄ス此込ニ於テハ支那
政府ノ名代タル者ナルカ日本人ノ臺灣島ニ在
テ其事ヲ行フニ頗ル迅速ナルヲ見テ大ニ驚キ
且ツ日本人ノ永ク此島ニ拠ランカト竊カニ疑
念ヲ起コシ忽チ模様替ヲナシタリ而シテ日本ヨ
リ遠征ノ人ヲ送ルルハ終カー一年以前ニハ總
理衙門モ大ニ願フ所ナリシガ今度ハ嚴ニ之ヲ
拒ミタリ而シテ總督ハ其議論ヲ張ラントシテ
スノ著述家ハツトル氏ノ昏ヲ援キ又ホイ

リン氏ノ萬國公法ヲドクトルマルチン翻訳シ
支那政府ニテ用ユルモノヲ授キタリ

是ニ於テ日本ニテハ此模様替ヘニ驚キ少シモ
猶豫セズシテ柳原公使ヲ北京ニ派出シ辨解ヲ
請ヒタリ然ルニ柳原公使ヲ遇スルニ甚タ疎忽
ニシテ且ツ之ニ告テ曰ク臺灣遠征ニヨリテ兩
國ノ間ニ困難ヲ生シタルヲ以テ其治マルマテ
ノ間ハ之ヲ請待スルヲ能ハズト
サレ氏柳原氏ノ北京へ到着ノ頃ハ兩國ノ和誼
未タ破レザル時ナレバ支那ノ日本公使ヲ受ケ

ナルハ交誼ヲ失スルト智ノベシ

バロンシヤールスド、マルタンスノ交際法第
一卷四十五面ニ曰ク、然レ氏和誼ノ未タ
破レサル時ニ他國ノ公使ヲ受クルヲ拒ムハ
適當ノ理アルニアラサレバ不和ノ端ヲ開ク

ト見做スヘシト

今度日本ノ臺灣遠征ノ舉ハ初ノ副島大臣ノ支
那ニ告ケタルトキハ却テ之ヲ勸メ而シテ其遠征
ノ人臺灣ニ到着スル時モ支那人之ヲ拒マサリ
シナレハ今之ヲ以テ日本ヲ告責スベカラス

如此ニ兩國ノ和盟一時破レタルニヨリ之ヲ治
メンガタメニ北京へ辦理大臣ヲ送リタリ蓋シ
其使命ハ支那ノ太政府ト直ニ談判シテ向キニ
福建ノ總督ヨリ西郷中將ニ書翰ヲ送リテ開申
シタル台湾ノ田雑ヲ治メントスルナリ

楷辦理大臣ハ北京ニ到着シ直チニ總理衙門ト
文昏ヲ取替ハシタリ是レヨリ先キ福建ニ在ル
支那政府ノ名代即チ地
方官欵ハ台湾遠征ノ都督ト論
スルトキニハ西洋英ニ亞米利加ノ著昏ヲ引キ
タリ依テ日本辦理大臣ハ今度モ右様ノ議論ノ

法ヲ以テ總理衙門ノ大臣ト言論相戦テ而シテ又
其著書ヲ引テ支那人ノ議論ヲ挫カントセリ然
ルニ今ハ衙門ノ大臣等ヨリ辦理大臣ニ返答ヲ
ナサズ何故返答セザルヤト按スルニ蓋シ辦理
大臣ノ万国公法ニ拠テ議論スルハ支那日本ノ
間ニ取結ヒタル條約上ノ義務ニ背キ且ツ日本
ノ新タニ取用ヒタル例ヲ以テ支那ニ及ホサン
トスルニテ其新例ノ一ヲ挙ルニ其外國交際ハ
一切萬國公法ニ拠テ治ムルニ是ナリト支那ノ
返答セサル所以ハ蓋シ是ナリ是ニ於テ辦理大

臣ハ其疑ヲ解カシメントセシカ支那人之ヲ聽
カス而ノ上ニ言ヘル如キ議論ノ仕方ハ總理衙
門之ヲ聽カズ

○
何等ノ理ニ由テ日本ヨリ支那ニ戰ヲ宣シ
テ可ナリト思ハルベキヤ

台湾蕃地ハ線カニ此ノ一年前ハ支那ノ管轄ス
ル処ニアラス但シ今ハ支那ニ屬ス從前支那之
ヲ取ラント要セザレハ即テ日本ノ自由ニ之ニ
入ルヲ許シタリ但シ今ハ支那之ヲ領サントス

ル故ニ日本人之ヲ明ケ渡スベシト是レ總理衙
門ノ大臣ノ言ヲ所ニシテ其外ハ辨理大臣ノ夕
メニ一言ヲモ發セズ又辨理大臣ソノ國ノ說ヲ
張ラントノ何事ヲ言フトモ聞クコトナシ
總理衙門ノ大臣ハ頑固ニシテ己レノ說ヲ張リ
真ノ議論ヲ以テセサルハ日本ニ對シ失礼ト謂
フベシ蓋シ日本ヨリ支那ノ說ヲ考フルニ理ニ
拠テ請求スルニアラズレテ却テ嚴命ヲ下タス
ニ似タレバナリ勿論支那ヨリ日本ニ對シ和親
ヲ保存セント言テ時々其辭ヲ飾ルト虽モ方今

支那全國戦争ノ用意ヲ為スヲ以テ考フレハ其
意ノ戦争ニ在ルヲ知ルベシ

支那日本兩國故國ノ廣狹異ニ人民ノ多寡金銀
ノ多少ヲ考フレハ支那戦争ノ用意ハ日本ノタ
メニハ大害ニシテ或ハ國ノ存亡ニ関スルモ未
タ知ルベカラス此危難ハ百方カヲ尽クシ自ラ
防禦シテ之ヲ避ケザルベカラス又兩國ノ位置
ヲ以テ考フレハ日本ヨリハ支那ニ往テ攻ムル
ヲ以テ上策トナスベシ

○

辦理大臣ノ北京ニ來ル其結局或ハ宣戦ニ至
ルモ知ルベカラズト虽モ和親ノタメニ來ル
ナリ是事ヲ世中ニ報告スベキノ手續キ
辦理大臣ノ支那ニ來ルハ宣戦ノタメニアラズ
乃チ和親ノタメナレハ成ルベキ丈ハ其使命ノ
遂テ和親ヲ厚ウスベシ
借辦理大臣ヨリ總理衙門ノ大臣ニ左ノ三ヶ條
ヲ請フベシ

第一ヶ條、台湾ノ蕃地ハ支那人ノ招キニヨリテ
日本人之ヲ領ス然ルニ今支那人之ヲ我有トス

ル所以ヲ書キ日本ヨリ之ヲ請ヒタル日ヨリ五
日ノ間ニ之ヲ明カニスベシ若衛門ノ大臣怠テ
之ヲ為サ、ル時ハ辨理大臣ハ使命畢リタリト
見做シテ北京ヲ去ルベシト報告スル
第二ヶ條右五日ノ間ニ一日ヲ定メテ支那帝ノ
柳原公使ヲ招待スルノ日トナスカ又ハ列日ニ
於テ其式ヲ行ハン
ツ其招待ノ式ハ欧米各國ノ公使ヲ遇スルノ式
ヲ以テスベキ事ヲ請フベシ又衛門ノ大臣怠テ
之ヲ為サ、ルトキハ支那ノ意ハ東京ノ朝廷ト

和盟ヲ破ルニ在リト見做シテ柳原公使ハ北京
ヲ去ラント豫シメ衛門ノ大臣ニ報告スヘキ事
第三ヶ條支那領分中ニ於テ戦争ノ用意ヲ為ス
ハ何故ナルヤ是レモ右五日ノ間ニ并解書ヲ作
リ辨理大臣ヲ經テ日本ニ通達スヘキ事若シ衛
門ノ大臣怠リテ其辨解ヲナサ、ルトキハ辨理
大臣ト支那戦争ノ用意ト即チ日本ト戦ハント
スルノタメトナシ之ヲ本國ニ告テ用意ヲ為サ
ンムル事

是仕方ヲ用フレハ和誼ノタメニ宜シキ事
辨理大臣右ノ仕方ヲ用ユルトキハ日本ニ人望
ヲ失セズ且ツ此ヲ機會トシテ條約ノ諸國モ自ラ
進シテカヲ尽クシ日本ノタメニ支那ヨリ准许
等ヲ得セシムヘシ蓋シ兩國ノ間和誼ノ存スル
ハ其准许等ヲ得ルト得サルトニ因ルナリ

○
是仕方ヲ用フレハ終ニ日本ノタメ戦争ノ
用意ヲナスニ宜シク且ツ内國ノ困難ヲ避
クルニ宜シキ事

此仕方ヲ取用ユルトキハ日本ノ公使北京ヲ去
ルノ前西政府臣ニ言ハントスルヲアリ辨理大
臣ヨリ外國ノ公使ヲ頼ミテ双方ノ間ニ立テ
談判セシメトスルモ遂ニ日本ノタメニ大ニ
裨益トナルヘシ徐々ニ事ヲ為ストキハ辨
理大臣ノ北京ヲ去ルヨリ天津ヲ出立シテ
日本ニ向ヒ發船スルマテノ間七日ノ猶豫
アルベレ即チ兩國ノ間ニ和誼ヲ保ツベキノ
望ミ全ク絶サルヲアリ辨理大臣ノ天津出立
前ニ之ヲ知ラシメントスルモ日本ノ代理公使

之ヲ為スノ時間アルベシ又辨理大臣日本到着
マテノ間ニ十五日ノ時間アリ此間ニ日本政府
ハ何等ノ処置ヲナスベキマテ決シ若シ戦ヲ好
ムトキハ戦争ノ用意ヲ調ヘテ支那ヨリノ攻撃ヲ
防キ或ハ支那ニ向テ往テ戦フベシ前ニモ言ヘ
ル道理アルヲ以テ戦ヲ宣シテ可ナルヘキナリ
又辨理大臣北京出立ヨリ日本到着マテノ時間
ハ日本政府後ニ時ヲ過コスヲナク竊カニ政府
ノ意ヲ人民ニ告ケ其宣戦ノ延引セシ道理ヲ告
ケ田テ内乱ヲ避ケバシ蓋シ政府ノ真意ヲ知ラ

ラザルトキハ内乱ノ起ルモ知ルベカラサルナ

リ謹言

千八百七十四年十月九日

北京ニ於テ
レゼンドル

辨理大臣大久保利通様

閣下

別紙第二号書翰第十号相添

ウエード君ト談話ノ筆記(此中ニカノ幾論ノ事件ニ付キ同人ノ意見ヲ挙ク)

臺灣遠征ノ事

日本人ノ攻入りタル領地ハ支那人未タ嘗テ明カニ其所有ノ權ヲ立テタルヲナキハ實ニ然リ(但シウエード氏三十年ノ經驗ニテ常ニ之ヲ支那人ノ所有ト見做シタレ氏)又日本政府ハ遠征ノ人ヲ送ルハ只副島氏由テ談判行届キタルト思ヒ之ニ依テ処置スルノコト思ヘリ然ルニ其遠征ノ用意ヲナシ其人ヲ送ルニ付キ猶ホ規則

ニ外レタル事アリ夫レハ今攻入ラントスル領
地ニハ住居スル所ノ人アリ是等ノ人ハ其住居
スル故ニ自然此遠征ノタメニ利害得失ナキア
タハス依テ日本ヨリハ此遠征ノ人ヲ送ルハ北
京ニ於テ談判届キタル上ニテノ事ナル趣キタ
是等ノ人ニ報告シ又支那ノ役人ニモ牴合テ此
遠征ノ主意ヲバ其攻入リノ領地ニ在ル支那人
ニ報告セシムバキナルニ日本ニテハ之ヲ為サ
ズ是規則ニ外レタル事アリ且ツ日本政府英ニ
大久保氏モ事ヲ秘レテ言ハザレハ外國ノ公使

タル者ハ只見聞シタル事實ニ據リ又支那政府
ハ此事ニ関スル文書類ハ外國公使ヲシテ之ヲ
見セシムルニヨリ支那政府ヨリ言フ所ノ辯解
ニ據テ意見ヲ立ツルノニニテ別ニ意見ヲ立ツ
ルコトアタハス勿論外國ノ公使敢テ支那ヲ助
ケントスルニアラズ支那ノ政事ノ因陋ナルハ
外國公使ノ惡ム所ニシテ自然公使ノ同意スル
所ハ日本ニアリ而シテドウエード氏嘗テ副島氏ニ
説明カセシ見込ヲ今又引テ話シタリ
但シ外國公使ノ敢テ之ヲ喜ブニアラズ却テ若

ウエード氏曰
本政府ノ意ヲ
説明シテ領
所以

カアラサランヲ願フト虽モ今現在見聞スル
處ノ事情ニ據リ又日本ノ見込ヲ聞クヲ得サ
ルニ由リ旁ヨリ竊カニ考フレハ支那ノ苦情ヲ
言フハ却テ其道理アルニ似タリ支那人ノ苦情
ハ蓋シ方今其領地(日本人之ヲ支那ノ有ナリト
許ス)ニ日本ノ軍勢占據スルノ事ナリ

ウエード氏ヨリ大久保氏ニ其使ノ趣意ヲ聞カ
ルヲ再三請フハ交際上ニ於テ非常ノ事ノ如
クナレ氏其意ハ別ニアルニ非ラス依テ其意味
ヲ領解セシメテ願ヒタリ蓋シ支那日本ノ間ニ

戦争起ルトキハ英國ニ於テ大ニ損亡アル故ナ
リウエード氏ノ考ニニ年々五千萬ニ及ベル交
易ニ之カタソニ失フテアルベシ依テ大久保氏
ニ再三懇請スルナリ勿論大久保氏ノ之ニ告ケ
サルモ全ク其理アルヲハウエード氏知ル所ナ
リ但レウエード氏ハ英ノ損亡ニ遇ハレテ心
配シ又本國政府ニモ安心スベキ様ニ告タルヲ
モアタハサルニ同ノ事實止ラ得ス電信ヲ送リ
軍艦ノ数ヲ増シ戦争ノ發スルトキニイタリ英
國ノタメニ守ラント思フニ足レリ

戦争ノ發スル
トキ他國利害
ヲ蒙ル

支那又ハ日本互ニ戦ヲ宣セントスルヲ外國ニ
テ其權ニ抵抗スルハ成リ難キ事ナリ然レトモ
ウエード氏ハ交貨ノ利多キ英國ノ名代人ナレ
ハ其身分ニ於テ日本支那兩國ノ間ニ和誼ヲ調
ヘント尽カセサルヲ得スフ
アメリカ或ハロシアノ如キハ此事ニ於テ格別
ノ關係アリ然ルニ英國ノ如キハ廣大ナル交易
ヲ行ヒ且ツ交易ノ枝葉多キヲ以テ一旦戦争ノ
起ルトキハ一方ハ英國ト一方ハ戦争國ノ中ト
更ニ困難ヲ生スルモ知ルベカラス尤恐ルベキ

朝鮮ノ事

ハ支那日本ハ海軍ニ不熟練ナルニヨリエウロ
ツパノ惡者之ニ乘レテ此邊ニ集リ来リ支那日
本ノ旗章ヲ以テ自守リ外國船ヲ侵撃シ遂ニ戦
争ノ困難ヲ増スモ計ルベカラス
是事件ハ日本ニテ事ヲ發スルモ理アルガ如シ
多分外國モ之ニ同意スベシ
ウエードハ苦頼マルトキハ和誼ノタメニ周
旋スベシ且ツ相当ナル事ヲ支那ニ申出サハ支
那人之ニ承諾スルヲ疑テ思ヘリ
他ノ諸件ノ重大ナルモノ

支那日本ノ間
ニ和誼ヲ保ツ
事

福建ノ總督ハ福州ノ海關稅ヲ引當トナシテ六
百萬弗ヲ借り甲錢船ヲ賣^買ハントセシニ北京ノ
政府之ヲ准セス

李鴻章ハ前ノ郵便船天津ノ住人某ヲ英國ニ送
リタリ其ハ天津近邊ノ錢石炭ノ礦山ヲ開カン
カタメニ器械ヲ買フナリト云然レハ思フニ外
國ノ人望ヲ得且ツ日本人ノ目ヲ駭カサントナ
ルベシ其費用ノタメニ別ニ法ヲ設ケタルヲモ
ナシ

別紙第三号書翰第十号相添

十三日ニウエード君ニ面會シ同人ニ言テ曰ク
大久保君ニ^華軍ノ模様ヲ通達セサル所以ハ應接
ノ模様未タ其場合ニ至ラサレハ充分ニ其事ヲ
明カストヲ得不但シ英國ノ此事ニ心配スルヲ
ハ大久保君ノ能ク理解スル處ニシテ二三日ノ
内ニ來訪シテ其事ヲ説明カスヘシ日本是迄談
判スル所ハ其名ニ関スル箇條ニシテ是ハ日本
支那ノミニ関スルト見做シタリ而シテ其償金
ノ事ハ第二ノ箇條ナリトウエード君ニ告ケタ

ウエーノ君曰ク其事件ハ我レ明カニ之ヲ知レ
リ而シテ日本ノ説ハ全ク條理明カニシテ支那政
府謹シテ之ヲ聽クヘキノミト云ヘリ

第十号 初稿 付録 中 四号

神機營官弁兵丁總目

和碩醇親王

大學士文祥

尚書崇綸

總理神機營事務王大臣

侍郎榮祿

侍郎恩承

專操大臣熙拉布

副都統景瑞

計開署内各等處

印務處 官四員 弁兵十二名

文案處 官十八員 弁兵二十四名

卷也 官務局

幫八助役

營務處

官四十員
辨兵六十名

摺奏處

官四員
辨兵八名

糧餉處

官六員
辨兵十二名

支發處

官二員
辨兵六名

核對處

官四員
辨兵十六名

收文處

官四員
辨兵八名

署外設立

軍器庫

官十六員
辨兵二十四名

軍火局

官辨同上
九火藥
一切由部局關領

洋槍威遠隊

精字隊

幫督操景瑞
明惠

管帶各官在外洋槍兵八百七

十五名

各帶俄國製
造銅帽槍

捷字隊

幫督操誠廉
祥順

數目同上

銳字隊

幫督操德壽
恩佑

數目同上

勝字隊

幫督操文秀
通裕

數目同上

震字洋礮隊帶隊官成章

洋礮兵五百名
炮車二馬拉所有之炮俱

是俄國製造綠色車俱用火
點放每輛用二馬六兵

駿字洋馬隊

官辨一千名

驤字洋馬隊

官辨一千名
槍俱用己做

各帶法國製小短馬

圓明園馬隊管帶大人岳林

官辨一千名

各帶中國槍用火繩點放

圓明園抬槍隊管帶大人托雲

兵千六百名
大槍八百桿

各代中國大槍用火繩點放

內務府幼丁技藝隊管帶大人興林

辨兵五百名

各代中國十八樣器械

健銳營馬隊管帶大人榮祿

辨兵五百名

各代中國火繩槍

健銳營洋槍炮隊

槍兵八百七十五
炮兵一百二十五

名健字隊

代俄國銅帽槍
代法國自藥九銅炮

代帶八零字

各代中國火繩槍

外火器營馬隊管帶大人熙拉布 辨兵五百名 各代中國火繩槍

外火器營洋槍砲隊 槍兵八百七十五名 砲兵一百二十五名 利字隊 各代中國銅帽槍 各代中國銅砲

內火器營馬隊管帶大人西蒙克什克 辨兵五百名 各代中國火繩槍

十處頭起馬隊 官辨兵丁五百名 各代中國火繩槍

十處二起馬隊 同上

五滿黃旗隊管帶大人伊崇阿 辨兵五百名

左翼驍騎抬槍營管帶大人博崇武 辨兵五百名

右翼驍騎抬槍營管帶大人 署任 安與阿 辨兵同上 各代中國火繩槍

第二

八漢排槍藤排營管帶大人尚宗瑞 辨兵一千二百名

八漢礮隊帶隊官成明 辨兵一千名 各代中國大小銅鉄砲大小鉛丸

中營小隊技藝隊帶隊官富森布 辨兵二百名 各代中國十八樣器械保護 七弁 五十六臣

外有

烏里雅蘇臺自北京至該處六千里在 俄國 印度國 交界

綏遠城 有一千五百洋槍兵至該處一千里由北京

歸化城 至北京一千二百里一千兵 各處均有神機營探去槍砲官辨兵丁

營 口五百兵

神機營馬步中外各兵總目

精

春也 官 分 司

洋步隊捷勝各有八百七十五名

銳

香山洋步隊八百七十五名

藍靛廠洋步隊八百七十五名

共有洋步隊兵五千二百五十名

內務府五百名

中步隊五滿黃五百名

左

翼各一千名

右

八漢一千二百名

中營二百

圓明園一千六百名

共中步五千名

洋馬隊共二千名

內火五百

中馬隊十處一千名

圓明園一千名

香山五百名

藍靛廠五百名

共三千五百名

洋砲隊

震字五百共砲二十四
藍龍廠一百二十五砲四

共七百五十名 共砲三十二

中國砲隊一千名

共中外步隊一萬二百五十名

共中外馬隊五千五百名

共中外砲隊一千七百五十名

共合一萬七千五百名

京營十處官兵單

鑲黃旗護軍營兵一千八百廿名

管營大人一員
小官辨在兵丁數內

正黃旗護軍營兵一千八百廿名

正白旗護軍營兵一千八百廿名

正紅旗護軍營兵一千八百廿名

鑲白旗護軍營兵一千八百廿名

管營大人小官辨都是
同上

鑲紅旗護軍營兵一千八百廿名

正藍旗護軍營兵一千八百廿名

鑲藍旗護軍營兵一千八百廿名

共官辨兵丁一萬四千名

左翼前鋒營兵一千五百名
右翼前鋒營兵一千五百名

管營大人一員
小官辨兵丁數目在內

同上

奏為閩省沿海地方遵

旨密籌防範謹將辦理情形恭摺覆

奏仰祈

聖鑒事切臣承准軍機大臣密寄同治九年六月二十

十五日奉

上諭現在各省沿江沿海口岸設立防兵能否真實
可靠著英桂嚴飭各該處帶兵各員隨時訓練實
力整頓並將現在辦理情形詳細具奏等因欽此
伏查各國傳教名為勸人行善寔則流毒無窮蓋

摺紙或紅帖紙
アリ總上申ノ文
書折本ヲ以テス
ル之ノ紙ヲ用ユ

包與抱同

楊瑞也

凡有血氣者莫不痛恨同深
天津一案

天津之南鄰有深州
因而讀為地名

狹恐挾字之誤

紉通作黜滅也

華民入教者皆非安分之徒其教士又多百方包庇

遂有所挾持任意欺害良民即無迷拐採割之事

已稍至不相容衅緣易啓况洋人動以兵船恐嚇

凡有血氣者莫不痛恨同深天津一案實由洋人

頻年肆毒激成衆情憤怒非一朝一夕之故也然

法國遇事尋衅今殺其領事洋人毀其教堂旗幟

彼必以戰相狹遂非理之請無厭之求沿海各省

誠不可不亟籌防範閩省沿海口岸向無專設防

兵自同治三年以來恃有大隊楚軍分札遣用近

因庫藏支絀節次將勇裁撤現住上下游者皆係

外左右二海軍アルモノカ

地方緊要酌留輯捕每處不過二三百名或數十

名不成隊伍至額設水陸標兵為數本鉅自裁兵

以後亦覺地大兵單隸水陸提標及鎮標者由提

臣總兵親率操防隸省標者由臣與將軍委員管

帶帶兵官分隊訓練技藝漸精若令禦侮折衝不敢謂真

寔可靠然兵氣之強弱全在統領之轉移即如水

陸提標兵丁經提臣李成謀羅大春訓練得力此

其明證也臣就閩省情形再三籌度現在福州厦

門台灣通商三口各國教士洋商因聞天津之信

恐群起而攻不免陰懷疑慮臣率屬示以鎮定

各也官務局

卑當作單無餘卒

憶恐懷之悞

復

始各相安臣復密飭沿海道員各於保護之中兼寓防範之法切思通商口岸各國均有教士洋商並暗中聯為一氣而明則各立門戶倘佈置稍露聲色則彼族共啓猜嫌尤恐內地奸民乘機生事設或別生枝節在彼更易藉口恭繹

諭旨飭疆臣暗中維凡洋人之情勢均在

聖明洞鑒之中臣擬將福州一口先統平日操演之

兵假保護彈壓為由重加簡選新任福建陸路提

臣江長貴現已到閩署提臣羅大春交卸在即已

密函囑其交卸後迅速來省統率所選各兵認真

堪通作勘

訓練實力整頓應否另行募勇調兵俟羅大春到

省臣與福州將軍文並在省司道會商安辦福州

沿海一帶團練皆志切同仇隨時堪以籌臣總理

船政大臣沈葆楨輿望攸歸如須號召團練臣當

商同沈葆楨激勸而召用之其廈門一口咨商福

建水師提臣李成謀會同與泉永道酌集師船勤

加訓練整理惟台灣孤懸海外防不勝防且兵力

又單人心浮動較福廈二口尤覺可虞現亦責成

台灣鎮道以固結人心簡練兵勇密為防範仍不

得遇事張皇致有潛謀蠢動先啓內顧之憂除隨

奏也

時確探天津情形分別緩急委心佈置外謹先將
遵

旨辨理情形恭摺由驛密陳伏乞

皇太后

皇上聖鑒訓示謹

奏

同治九年七月十八日福建總督英由驛密奏稿

別冊第五号書翰第十号相添

十月十二日ハルト君ト會話ノ筆記

日本ハ支那受府ヲシテ頑固ナル受事ヲ用ユル
ト少ナカラシメテ大ニ支那ノ事務上ニ感動ヲ
行ヒタルニ付キ又此感動ノ猶ホ続カンコトヲ希
望スルニ付キ又方今支那日本ノ間ノ困難ニ付
テハルト氏ノ曰ク此度ノ事件ハ甚ク困難ナル
案件ナル氏必ラス結局ニ至ルヘシ但シ何様結
局ニ至ルヤ未タ之ヲ知ルヘカラス又問テ曰ク
償金ニテ日本ハ満足スルヤ償金ノ高ハ何程取

ラント欲スルマテ答テ曰ク日本ノ欲スル処ハ
何ナルヤ予之ヲ知ラス但シ思フニ償金ノ事ハ
第二ノ箇條ニシテ日本ノ尤モ思フ所ハ其名ニ
アルノミトハルト氏曰ク尚ホ四日アリ此中ニ
此事ヲ調フルヲ得ヘシト云テ談話ヲ止メタリ

ピットメン署名

第^十五^十號

千八百七十四年十月十七日 北京

閣下

余カ今月十四日ノ書状第^十号ニ尔後支那人ヨリ
聞込タル説ヲ報告セント約セリ余最初ハ^{インクイ}
^{全下}ニ對面セシトテ欲セシカ余ニ甚タ抵抗セ
ル英國公使ヲシテ目今ノ應接ニ就テ余カ關係
少キヲ知ラシメン^ト要緊ナリト覺エシ故姑^テ
ク此事ヲ猶豫セリ盖シ余ジユクエイト對面セシ
上ニテハ^{ウエ}ト氏モ必ス之ヲ聞知リ必然大久

保氏モ之ヲ兼知ノ事ナラント思フ可ケレハウエ
ト氏ノ疑ヲ解キ難キヲ以テナリ而シテ今テハ
英國公使モ余カ大久保氏ト同氏トノ間ニ立入
ルヲ待タスシテ能ク一致シテ事宜ヲ謀ルニ
至リタレハ却テ其疑惑ヲ引起サント危シト思
ヘハナリ余知ルハルト氏ハ若シ方今支那ト紛
争ノ事件決着スルニ至ルナラハ其之ニ關係シ
因テ之ヨリ信用ヲ得ルニ至ル可キヲ嫌ハサル
ナル可シ故ニ余同氏ヲ頼テ支那ト通信ノ私ノ
仲立トシテ用ヒタリ

之カ為メニ今月十二日表向キ港税稟報ヲ問フ
為メニ同氏ヲ招キシニ同氏ヨリ大久保氏ノ使
事ノ問ニ及ヒ余カ未ダデユクエイニ對面セサリ
シト聞キ大ニ驚キテ其故ヲ問ヘリ余之ニ答
ヘテ余カ当地ニ在ル地位ハ大ニ之ト異ナリ大
久保氏ハ支那ヨリ修整ノ申シ出シ有ル可シト
思ヒ居ル事ナレハ余ハ隨意ニデユクエイニ何事
ヲモ言フヲ得ス支那ハ大ニ兵備ヲ整ヘ之ヲ以
テ日本ヲ攻^ヒサント催シ居ル事ナレハ右ノ如
キ申シ出シヲ速ニ為サ、ルナラハ大久保氏ハ

支那ニテハ申シ出シヲ為スノ意無シト決意ス
可シ且又支那全國皆成ル丈ケ戦争ノ時期ヲ遅
延シ日本ヲ一撃ニ破ラン程ノ準備ヲ為サント
欲セリ是大久保氏ノ決シテ黙視スル所ニ非ル
可シ之ヲ為メニ同氏ヨリ總理衙門ヘ決答ヲ為
ス可キ日限ヲ申シ送レリ此日限ハ今月十四日
若シクハ十五日皇帝歸京有ル可キ時ノ後三日
ヲ以テ期トセリ若シ此時ニ至テ決答無キ時ハ
同氏其使事終リタリト見做シテ日本ヘ歸國ス
ルナル可シト云ヒタリ又曰ク斯クノ如キ場合

ニ至ラハ余恐ラクハ支那ハ却テ敗辱ヲ取ルニ
至ル可シ何ントナルニ日本ハ既ニ戦備アルニ
支那ハ未タ其準備無ケレハナリ又同氏既ニ總
理衙門ニ聞知シ且日本ノ希望ハ正理ノ上ニ基
ツケル者ナルカ故ニ同氏ハ必然和平ヲ主張シ
テ事ヲ行フナル可シト云ヒタリ然ル後又曰ク
若シ同氏ヨリ最初ニ其諾無カリシナラハ余此
事ヲ以テ同氏ニ問ヒ及ボサ、リシナル可シ然
ルニ同氏ヨリ此話有リシ故ニ余ハ身分相應ニ
同氏ニ對シテ意^衰ヲ隱カス余カ説ヲ述ルナリ

同氏ニ必然同心ニテ隱スナカル可シト思フ
ナリト云ヒタリ

ハルト氏之レニ答ヘテ余ハ支那ニ於テ官ヲ奉
シ在ルヲ茲ニ二十年ナリ今爰ヲ去ラントスル
ノ意アリト云ヒ又日本ノ支那ヲ動カスニ開化
進歩ノ方略ヲ以テスルヲ知レリ其言ニ云フ以
後十ヶ年ノ間支那ハ大ニ開化ノ域ニ進ムナル
可シ故ニ此要緊ノ時節ニ至テ此地ヲ去ラサル
ヲ得サルハ甚ク遺憾ノ事ナレトモ余カ職務
過重ニシテ心カヲ費耗スルヲ以テ大イニ

身軀ノ健全ヲ害セルカ故ニ姑ク將息セサル
ヲ得スト云ヘリ又云フ支那ノ趣意ハ方今日
本萬事外國ノ様ヲ模倣セル時ニ當テ支那
ト戦争ヲ為シ之ヲ破降スルヲ亦正ニ外國ノ
例ノ如クナラント願フナリト云フニ在リト
云ヘリ余之レニ答ヘテ云フ日本ハ次ニテ斯ク
ノ如キ意無シ唯自國ヲ強ウシ外侮ヲ防キ其獨
立譽名ヲ保全スルヲ得可キ事ニ於ケルカ如
キ者ハ專ラ外國ノ様ヲ模倣スルノニ若シ支
那ヲシテ夙ニ此例ニ倣ハシメハ其富強豈ニ

方今ノ如キ比ナラシヤ初メ外國ヨリ支那ニ諸
般ノ許可ヲ請求セシニ其事柄支那ヲ醒悟セ
シムルニ至ラントスル者ナリケレトモ支那ニ
テハ断然之ヲ拒メリ而シテ之ヲ為スニ至レハ
却テ支那ヲ富強ト為セリ此度モ亦ク同
一轍ノ理ヲ以テ之レヲ為ス一ヲ拒メリ此
等ノ許可ノ中ニ國境外ノ故ヲ以テ其國
ヲ開クノ事有リ以テ見ル可シ台湾ニ就テ余云
フ日本ニテハ其政法無キ間ハ支那ト外國トノ
間ノ爭論ノ原回タル可シト思ヘリ此地ハ亞細

亞南東ノ地ニ於ケル最モ緊要ナル要害ノ地勢
ナリ若シ支那之ヲ領セスハ日本之ヲ領セサルヲ
得ス日本ハ其人民ヲ殺サレタル後ニ年ノ間支
那ノ處置ヲ待居テ然ル後台湾蕃地ニ行キ支那
ノ承知ヲ以テ近日ノ舉有リシナリ其事ハ去ル
五月十一日日本外務卿へ総理衙門ヨリ送レル
書狀ニ依テ證スヘシ日本ハ此舉ニ於テ決シテ
支那へ敵對ノ意ニ非ス日本人民ヲシテ支那ニ
敵對スルノ意ヲ起サシメシ者ハ支那人ノ不信
ナルヲ惡メハナリ支那人賄賂ヲ以テ余ヲ引入

ントシ且專ラ戦争ノ準備ヲ為シ居レル最中ニ
チエンパオチアンヨリ西郷都督へ申シ出タル條約
ノ言辞ニ依テ明白ナルカ如キ即チ是ナリ日本
ノ要スル所ハ唯其權利ナリ支那若シ從來台湾
ヲ棄置タルニテ頓然タルカ如ク此地ヲ欲セザ
ルナラハ甘ンシテ日本ニ之ヲ贈ルヘシ日本ニ
テ人命金穀ヲ費シテ支那ノ自カラ當ニ行フ可
キ事務ヲ為セシニ依テ其事情知ル可シト云ヒ
タリ

其時ハルト氏余ニ約シテ云フ余總理衙門ニ行

キテ明日足下ニ其返答ヲ為ス可シト云ヘリ
皇帝十三日ニ北京ニ帰着無カリシ故ニハルト
氏モ此日ハ總理衙門ニテ何事ヲモ成就スルヲ
得サリキ然レトモ次日皇帝モ帰京有リタレハ
同氏總理衙門ニ行ケリ諸大臣ニ暇ヲ告ケ帰リ
来リテ後余ヲ招キテ云フ明十五日ニハ衙門ヨ
リ大久保氏ニ返辞ヲ贈ルナル可シ是ニ於テ目
今ノ紛紜ノ事決着スヘキ者ナラハ其修整有ル
可キト疑無カルヘシト云ヘリ殊ニ同氏ノ確知
セント欲セル所ハ償金ノ金高何程ニテ日本ノ

満足有ル可キヤト云フニ在リサレトモ同氏此
事ヲ問フニ當テ余ノ答ニ大久保氏其全權ヲ取
レリ他人之ヲ與聞スルヲ得ス余ハ唯大使ノ使
事ニ少シク關連有ルノミナレハ彼カ其助言人
トニテ行ヘル談判ノ事ヲハ嘗テ助ケス然レモ
余ハ大使ト親懇ノ交ナレハ若シ支那ニテ修整
ヲ欲スルノ證ヲ示サハ同氏ノ必ス深ク拒マ
サルヲ知レリ若シ総理衙門ヨリ其申出シ有ラ
ハ余思フニ之ヲ承諾スルハ日本ノ義務ナレハ
余尽カシテ大使ト共ニ之ヲ周旋セント欲スル

ナリ余カ了見ニテハ支那若シ台湾蕃地ノ日本
ノ費用ヲ償ヒ及ヒ日本出征ノ間ニ失ヒタル人
命及ヒ其他ノ損害ニ對シテ相當ノ償ヒヲ為ス
ト無クシテ蕃地ニ入ラント欲セハ世間ノ承許
セサル所ニシテ却テ其謗ヲ受ク可シ又其與フ
可キ償ノ金高ハ世ニ同様ノ先例有レハ之ニ准
シテ定メシト容易ナル可シト云ヒタリ又余カ
持論ヲ述テ云フ若シ支那ヨリ日本ニ台湾蕃地
ヲ引拂フ可キ十分ノ所以ヲ示シ且其損害ノ跡
ヲ残サス許諾ス可キ程ノ償金ヲ與ヘハ必ラス

其地ヲ棄引拂フ可シ然レモ若シ此事ヲ為ス
ナクハ日本ハ長ク蕃地ニ留ル可シ而シテ後ハ
必ラス戦争ニ及フナル可シト云ヒタリ此時ハ
ルト氏ノ言ニ余ハ甚タ和平ヲ希望セリ若シ戦
争一タヒ起ラハ必ス兵結テ解ケス其時間長カ
ル可シト云ヒテ余カ説ヲ聞カントセシカトモ
余更ニ此事ノ余カ説ヲ言出ズシテ答テ云ク余
カ眞実ニ望ム所ハ和平ヲ保全セントノ足下ノ
勉力成就アラントニ在リト云ヒタリ
翌日十五日ニ余カ覚書三十七号ヲ書テ大久保

氏ニ送リタリ其寫書ハ(別紙第一号)別紙ニ書シ
テ送呈セリ次日余カ覚書三十八号及ヒ三十九
号ヲ書シテ送レリ其寫書ハ(別紙二号及ヒ三号)
亦別紙ニ呈進ス

昨日午後大久保氏ニ謁見セリ同氏ノ言ニ余カ
望マント欲スル所ノ償金ハ五百万弗ナリ然レ
モ若シ支那ヨリ日本ノ琉球ニ於ケル權利ヲ承
認スルナラハ之ヲ三百万弗ニ減セント思フナ
リト云ヘリ余之ニ余カ東京叢程ノ前ニ閣下カ
余ニ話セシ事ヲ以テ告ケ知ラセ且云フ余カ論

ニテハ台湾ニテ琉球人ノ殺サレタル償ヒ金ヲ
支那ヨリ日本ニ與フルノ事實有レハ是即チ琉
球ニ日本ノ權利アルヲ承認セシ者ト算スヘシ
若シ琉球ノ事件ヲ言ヒ出スナラハ君主ノ權ノ事
トシテハ不可ナリ唯琉球ニ在ル琉球人ヨリ貢税ヲ
納ル、間ハ台湾事件ノ修整アリシ後日本ト支
那トノ政府ノ間ノ異論ノ原因トモ成ル可キ税
額ノ一事トシテ言ヒ出ス可シト言ヒタリ同氏余
ニ此事ニ就テノ方畧ヲ問ヘリ
余同氏ニ問フ支那官負ヲシテ暗ニ日本ノ要

需スル金高ヲ知ラシムルノ策(例ハ支那ノ間
者ヲシテ余カ故意ニ机上ニ遺シ置ケル書冊ヲ
讀マシムル策ノ如キ是ナリ)ヲ用フ可キカト
云ヒシニ同氏ノ答ヘニ是レ良策ニ非スト云ヘ
リ
此夜ノ間余カ覚書四十端(別紙四端)ヲ書ヒテ今
朝大久保氏ノ許ニ持参シ謁見シテ数刻ノ會談
有リ同氏余カ説ヲ問フテ若シ支那一事ヲモ申
シ出サ、ル時ハ如何ニ為ス可キヤト云ヒシカ
ハ余之レニ告テ云フ余カ思フニハ彼等必ス一

事ノ申出シ有ル可シ然レトモ若シ然セサル
ナラハ余其時郷ニ助言シテ台湾征討ニ就テ日
本ニ批リタル費用及ヒ支那自國ニ對シ共ニ日
本ニ對シテ此費用ヲ償フ可キ支那ノ義務ノ論
示ヲ為サシム可シト言ヒタリ同氏答テ時宜ニ
應シテ指回ヲ受ク可シト云ヘリ

此日午後支那ヨリ期シテ明十八日大久保氏ノ
家ニテ應接有ラシトテ靖ヘリ此應接ニテ大久
保氏ノ使事何如ニ落着ス可キカ必ス一次ニ至
ル可シ余カ説ニテハ支那ハ台湾蕃地ノ權利ヲ

問ハレタル一条ヲハ避テ議論セサル可シ唯前
時該地ヲ管理スルニ急リタルトテ義認スルナ
ル可シ且琉球人ヲ殺セシ償金ヲ出ス可シト云
フナル可シ此償金ノ高ハ日本ニテ該地ヲ引拂
フニ満足ナル償ト思ハル、程十分ニ多カル可
キカ且日本ノ面目威名ヲ失ハシメサル作法ニ
テ拂ハル可キカ未タ之ヲ預定スルヲ得難シ

リセンドル

蕃地事務卿大隈重信公閣下

第十二号入封書第一号

記録三十七号

我輩臺灣地方官員ノ唯ニ書簡ヲ採テ(此書信ノ
寫シハウイリヤム君ノ呈スル処ナリ)臺灣ハ支
那附属ノ地ニイラサルヤノ證トシテ決断スル
ハ難事タリ而シテ又各國事務総理衙門ヨリノ
申シ出シニ對シ此書簡ヲ記セシ官員ハ見ル処
只ニ己レノ職務ノ干スル処ヲ他ニ讓ラン為ナ
ナリト答ヲナサンモ亦等シク難事タリ
而シテ此書簡ヲ輕視セサランニハ我輩之ヲ支

那政府ノ命ニ由テ出版セルト云フ官版支那圖
ヲ引合セザルヲ得ス而シテ此地圖ヲ見ルハ
以テ地方官員ノ迷ヘシ處実事タルヲ知ルニ足
ル可シ其故ハ官版地圖ニ此地方ヲ載セス又羅
馬宗徒メーレルラ及ヘンドレルノ著ス地圖及ヒ
チャンスースーキンノ地圖及ヒ我輩著ス處ノ臺
灣生蕃地方ハ支那帝國ニ屬スルヤ否ト題セル
書ノ四圖五圖ヲ證トスルニ足ル

ウィルリヤム氏ノ說ニ支那政府ニテハ決シテ官
版地圖ノ中チニハ支那帝國版圖中ニ住居スル

野蕃ノ國ヲ載セスト然レトモ其說ノ眞実タラ
ザルハ廣東省ノ地圖ヲ見テ知ル可シ此地圖ノ
中チニ支那ノ地理學士ハハイナン等ノ全海岸
ヲ載セタリ而メリモ一チャイ昂チトシチャイト称
スル野蕃ノ地境ヲ載セリ然リ而メ唯リ臺灣ヲ
載セサルハ何ノ故ゾ之レ蓋シ(前文書簡ニ於テ
地方官員ノ談セシ如ク)臺灣野蕃ノ國ハ支那ニ
附屬セス今年日本人ノ此地ニ攻入セシ迄ハ支
那ニテ之ヲ支那版圖中ノ者ト見做サバリシナ
リ

チャンスーキン及ヒメーラ及ヒヘンドレン
氏ノ地圖茲ニ附呈ス之レ前文陳述セシ議論ノ
證據ニ供セラレン為メナリ頓首謹言

レゼンドル花押

大久保利通君ニ呈ス

別冊第二號書翰第二號相添

覺書第三十八號

千八百七十一年七月廿八日ペルハムワールン
氏英船ロリダウンカッスル号難船ノ水夫ヲ探
索センカタノニ南臺灣ニ往キシ事ハ同氏ノ言
上書ヲ以テ據トナスヘク其自ラ寫セシ書ヲ予
モ所持セリ蓋シホソリノ南方ニ在ル支那人
之ヲ領セスワレン氏ノ言上書ノ書拔ニ載ス
ル所ハ此ノ如シ(別冊第七号ヲ此覺書ニ相添ヘ
タリ参考スヘシ)

此地若シ支那人ニ由リ領セシナランニハ難船
ノ時死ヲ免カレタルモノヨリ其難船ノ趣キヲ
將テ其地ニ於テ支那受府ノ名ヲ以テ受テ行フ
役人ニ報告スヘキナリ然ルニ之ヲ為サス言上
書ノ書拔第一面第二行ヨリ第七行マテヲ参考
スヘシ

此場所若シ支那受府ノ管轄ヲ受ケシガラシニ
ハ支那ノ役人ソノ破船ノ人ヲ探索ノタメニ派
出セラレシナルヘシ然ルニ是事ナシ依テワ
レン氏自ラシヤリヨウニ往キ跡ニハ向キニハ

ンリヨウ即チホンリニ於テ土人ノ名代トシ
テ同氏ニ隨行セシメタル支那役人ヲ残シ置キ
タリ言上書ノ書拔第一二三面第十行ヨリ第五
十行マテヲ参考スヘシ

此地モシ支那人ノ管轄ヲ受ケシナラハ支那人
ヨリ難民ノタメニ家屋ヲ給スヘキナリ然ルニ
是事ナクチエンパツエン自ラ費用ヲ拭ケテ其
難民ヲ糶ビタリ言上書ノ書拔第二面第二十
行ヨリ第四十二行マテヲ参考スヘシ
此地若シ支那ノ管轄ヲ受ケシナラハ難船ソト

キ死ヲ免カレタルモノハ支那役人土人ノ手ヲ
經テ救助スヘキナリ然ルニ是事ナク領事館ノ
通譯官其救助ヲ得セシメタリ言上書ノ書拔第
三四面第五十六行ヨリ第七十二行マテヲ参考
スヘシ

此地モシ支那ノ管轄ヲ受ケシナラハ夫ノ十八
蕃種ノ酋長ニシテチエン、フツエンノ人種ノ正
東ノ地ヲ領スルトケトツクモ敢テウォレン氏
ニ使ヲ遣リテゼ子ラール、レゼンドルト條約ヲ
結ハントハセサルヘシ必ラス支那受府ト條約

アラントヲ願フヘキナリ言上書ノ書拔第四面
第七十三行ヨリ第八十行マテヲ参考スヘシ
此覺書ニ言フ所ハ別帛地圖ヲ見レハ明了ナル
ヘシ(別帛第二号ヲ参考スヘシ)

北京

千八百七十四年
十月十六日

チヤス、ウ、レゼンドル

辨理大臣大久保利通様

別紙第一号

千八百七十一年十一月二十日タコーノ英

國領事館ニ於テ書ス

七月二十三日英船ロンドンダウズカツスル号ノ
甲比丹下役某ツノ水夫ノ中十二人ヲ率チテタ
コーニ到着シ右ノ英船臺灣ノ南西ノ海岸ニ於
テ破船シタルニヨリ之ヲ捨タル由ヲ言上シ且
ツ云フ甲比丹并ニ水夫ノ死ヲ免カレタル者ハ
都合七人ニテ直チニ破船ノ場ト相對シタル海
岸ニ上陸シタリト

予ハ其場所ノ模様ヲ聞キ其船ノ破船シタルハ
クワリアン湾ナル事ト其甲比丹水夫ノ上陸シ
メルハコアロツト人種ノ中ナル事トヲ推察シ
即チカノ及フタケ其救助ノタメニ方法ヲ設ケ
ントセリ爰ニ三十一日ニハ英國領事館ヨリ予
自ラ出立シテ其雜民ヲ探索スヘキノ命ヲ受ケ
タリ

八月二日ニハ道臺ヨリ派出シタル文那役人ヲ
隨行セシメホリヨリ出立シ駕ニ乗リ途中ト
シカンニ於テ泊スルコト一夜ニシテ終ニホシリ

ヨリマテ旅行シメリ此地ニ於テ請取タル報告
ニ拠レハベタンヨリ我レニ送りタル使者ノ甲
比丹并ニ水夫ノ在可ヲ見出シ遂ニ甲比丹并ニ
一人ノ徒弟ヲ助ケレトヲ得テ之ト共ニタコト
ニ帰リタリト云ヘリ又船ノ破船シタルハクワ
リアン湾ニハアラズリヤンギヨリ湾ニシテシ
ヤリヨリヨリ南ノ方凡ソ七八里ノ処ナルヨシ
ヲ聞キ又一小蕃種ノ名ノミ支那ノ管轄ヲ受ク
ル者アリ夫ノ船ノ甲比丹并ニ水夫ハ其蕃種ノ
頭人ノタメニ捕ヘラレタル由ヲ聞キタリ抑是

頭人ハ名ヲツヱンブツヱント云フ者ナリサテ
甲比丹并水夫ヲハ七八里ホド内部ノ方ニ連行
キ一人ゴトニ千封度ツ、ノ購金ヲ出サハ之ヲ
放チ還サント云ヘリ是ニ於テ甲比丹并ニ其徒
弟ハ自身ノ分并ニ残ル九人ノ分ノ購金ヲ出サ
ン事ヲ引受ケタル上ニテ放チ還サレタリ
又予ハホソリヨ一ニ在ル一週日ニシテ
小船ヲ得テ出立スルノ策ヲ遂ケリアンキヨ一
マテ進ミタリ此間ノ距離凡ソ二十里乃至二十
五里ナルベシ是度支那ノ役人ハ小船ニ乗リテ

去ラ肯セズシテ猶ホホソリヨ一ニ留マリタリ
ナテ予輩ハ八日ノ日没ノ頃リヨ一此語恐
字アリ或ハヨリ到着シタリ
翌日夫ノ見失ヒタル水夫八人ハ其遁逃ノ計ヲ
行ヒテ歩行シテシヤリヨ一ニ到レリ然ルニ残
ル一人ハ賄方ナルカ嚴重ニ守ラレハニヨリテ
遂ニ遁逃スルヲ得ス
支那人ニ由リ之ヲ救助セントシテ敷度計ヲ運
ラセシカ皆其功ナシ依テ領事館ノ通譯官ヲ遣
リタリ是常ニ予ト同行シタルモノナリ諸テツ

エ、ブツエ、ンノ許ニ到リ夫、賄方ヲ放テ還サ
シヲ談判セシメ若シ事実止ムヲ得サルトキ
ハ頭人ニ五百封度ノ褒賞ヲ與フベキノ推ヲ委
子メリ是ニ於テツエ、ン、ブツエ、ンハ直チニ其人
并ニ破船ノトキニ得タル時計衣服マテモ之ヲ
渡サンコトヲ好ミタリ而シテ其褒賞ノ事ハ英國ノ
領事官ノ裁定ヲ請ヒ又其人ヲ渡スコトノ延引ヤ
シ所以ハ之ヲ支那人ニ渡スヲ願ハサルニヨレ
リト云テ大ニ謝シタリサテ其賄方ヲハ翌日ニ
送リ來タレレ故ニ予ハ九人ヲ連レテタコトヲ

指シテ出立シメリ

予カ知レ所ニテハツエ、ン、ブツエ、ンノ番種ハト
トケトツクノ管轄ヲ受ケス又予カシヤリコト
ニ在テ聞ケレニハトトケトツクハ折ニ觸レテ
ゼ子テール、レゼンドルノ事ヲ尋子今一度面会
シテ新々ニ條約ヲ取結ハシコトヲ願ハリト云ヘ
リ

ポルハム、ワトーレン署名



Tauke to H

Chou pu Liao
Tribes

Place where the Low down
Coast" was written

日本皇帝陛下ノ受府ハ臺灣蕃地ヲ支那帝國ノ
 領地ノ外ニ在リト思ヘリ故ニ右受府ニ於テ壯
 丹人ノ日本臣民ヲ殺害セシ其罪ヲ問ハシカ為
 メ頗ル辛苦シ且ツ人命ヲ損シ財貨ヲ費シタル
 ニ付キ徵收スヘキ賠償ハ原來其蕃地人民ヨリ
 之ヲ得可ク而メ將來更ニ牡丹人ノ惡業ニ類ス
 ル兇暴ノ行トカラシメシカ為メ其蕃地ニ日本

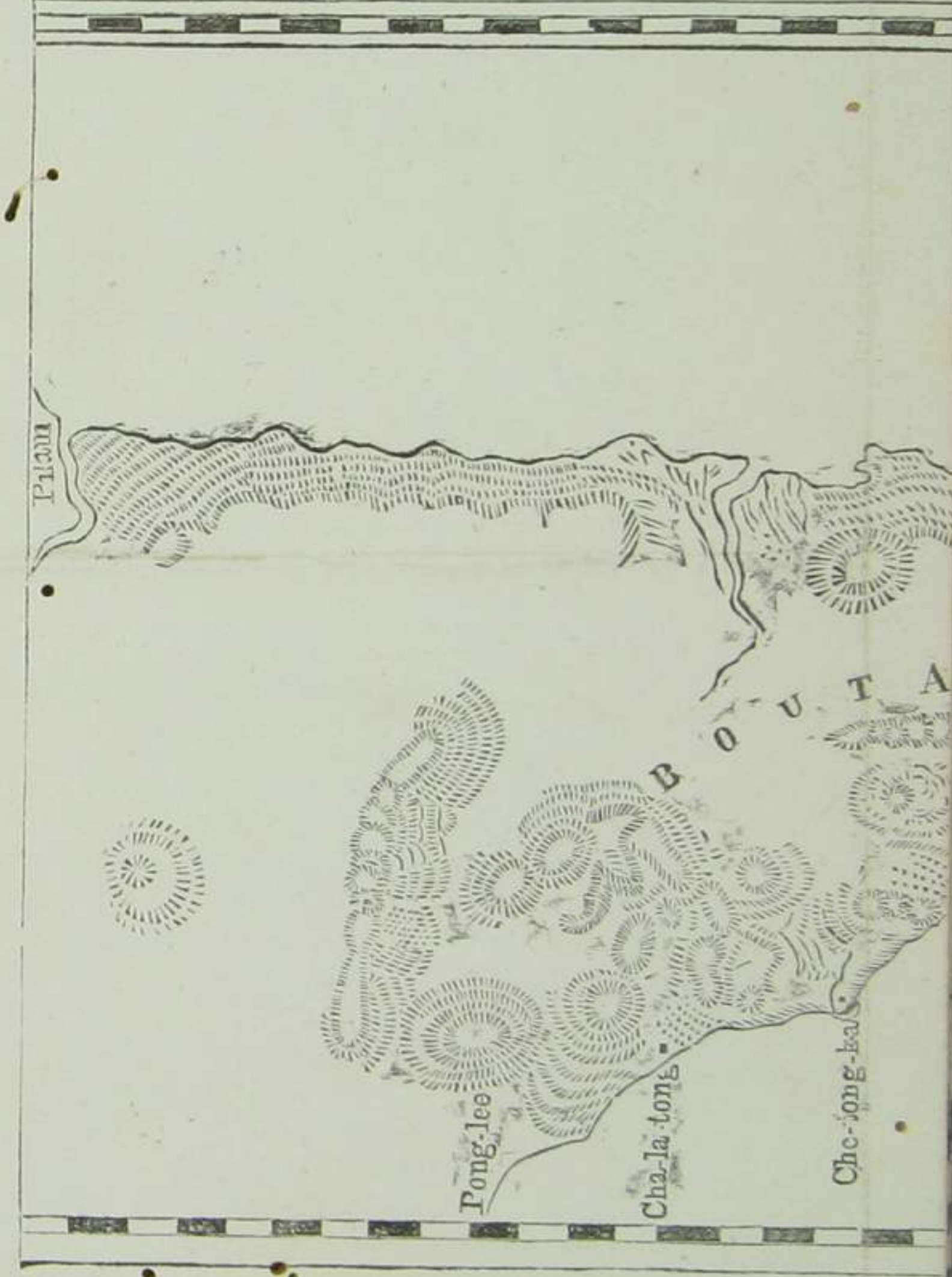
第三号別添

第三十九号覚書

THE

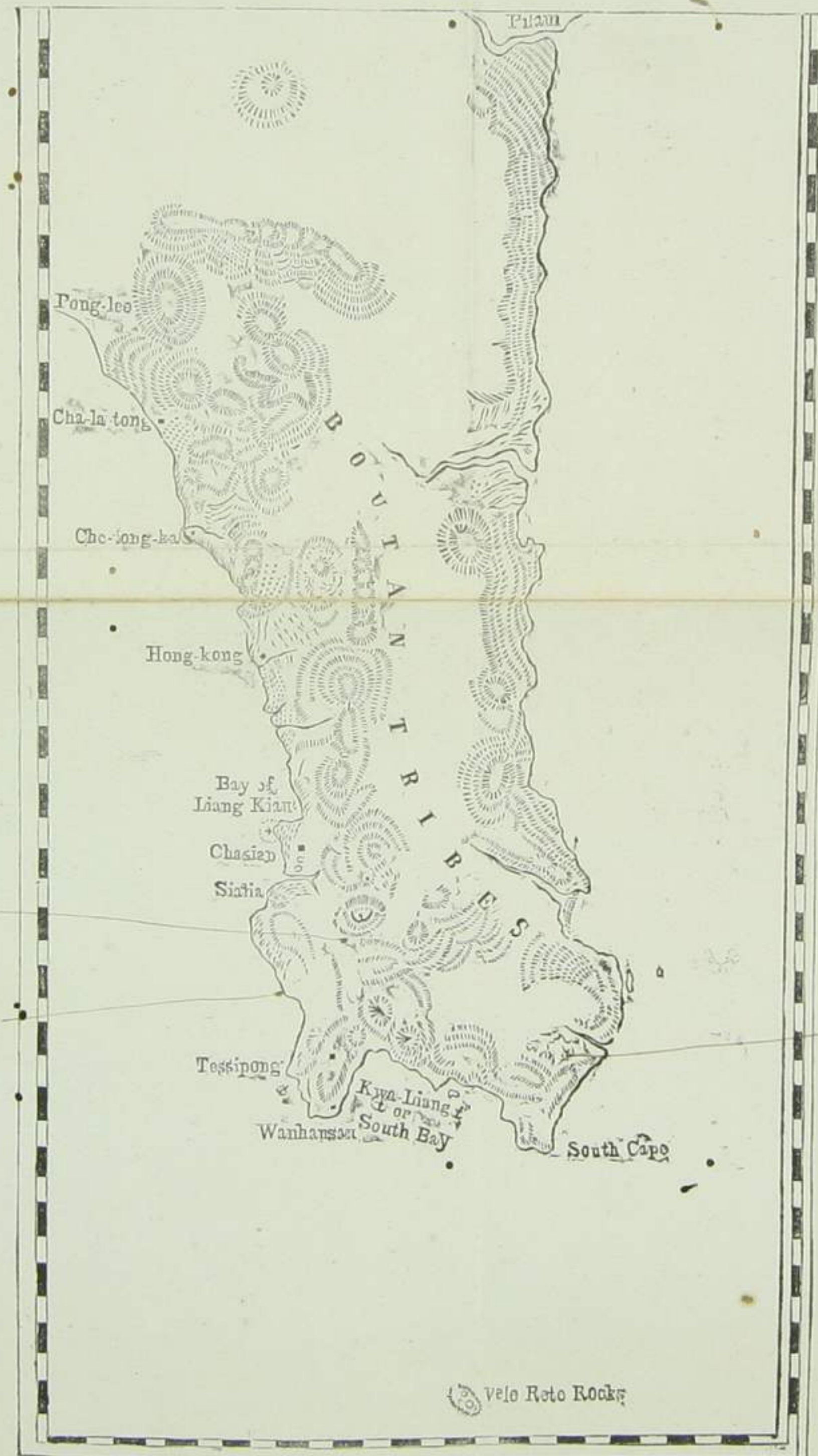
SOUTHERN PORTION OF FORMOSA.

COMPILED FROM THE MOST RELIABLE SOURCES.



THE
SOUTHERN PORTION OF FORMOSA.

COMPILED FROM THE MOST RELIABLE SOURCES.



*Chou ju Zuo
village*

*Place where the "Londona
Coast" was wrecked*

Tauke to H



ノ律法ニ循テ受令ヲ設クヘシ
若シ然レハ支那ニ於テ日本ノ臺灣蕃地ニ於ケ
ル權利ヲ已レニ轉移スルヲ得ル時ハ方今右生
蕃ノ擔任セル義務ヲ支那ニテ引受ク可ク故ニ
支那ハ日本皇帝陛下ノ受府ニ對シ左ノ二箇ノ
義務ヲ負フ可シ

第一 日本ニ満足ナル様蕃地ニ受令ヲ設
クル事

第二 日本ニ償金ヲ拂フヘキ事

而シテ右ノ中第一ノ義務ハ予今敢テ此ニ論セ

ス

又第二ノ義務ニ付テハ方今日本ノ為ス所ニ類
似サル餘ノ場合ヲ比較シテ以テ其義務ノ標
度ヲ量ルヲ得可ク而シテ最モ之ニ適當セル
先例ハ英國ノアシヤンチ山人種ヲ征討セシ役
ニ在テ蓋シアシヤンチ山蕃地ノ倫敦ニ於ケル
ハ牡丹蕃地ノ東京ニ於ケルニ比スレハ更ニ遠
ク隔絶スト虽モ牡丹蕃地ニ於テ戦鬪ヲ為スノ
困難ハアシヤンチ山蕃地ニ比スレハ更ニ大ナ
リトス

然ルニ英人ハアシャンチー人ヨリ一百万ポンド即チ幾ント五百万弗ニ及ヘル償金ヲ納レシメタレド日本ハ更ニ之ヨリ寡ナキ金高即チ二百万ポンドニ著クハ二百八拾萬ポンドノ償金ヲ以テ足レリト為スヲ得可シ然レド思案ニテハ日本皇帝陛下ノ全權辦理大臣一旦右ノ償金高ヲ要需セシ上ハ更ニ其高ノ減少ヲ承諾セリル可キナリ

千八百七十四年十月十六日北京ニ於テ

謹呈

チャーレスダグリユウ、レゼンドル

大日本全權辦理大臣

大久保利通閣下

第四号別紙

第四十号覺書

條約箇條

日本皇帝陛下及之支那皇帝陛下、方今日本支
那兩國間ニ在ル所ノ紛訟ヲ鎮定シ且ツ後來兩
國ノ交際ヲ更ニ確固タル基礎上ニ置クヲ欲シ
嘗テ千八百七十三年五月 日支那皇帝陛下ノ
全權欽差ト日本皇帝陛下ノ全權欽差ト互ニ和
親貿易ノ條約ヲ取替ハセ其條約ニ日本臣民支

那皇帝陛下ノ領地内ニアル外國貿易開港場ニ
入ル時ハ一定ノ税則ニ從ヒ若干ノ海關稅ヲ納
ム可ク又支那臣民日本皇帝陛下ノ領地内ニア
ル外國貿易開港場ニ入ル時ハ亦一定ノ税則ニ
從ヒ若干ノ海關稅ヲ納ム可キヲ決シ
旧時ノ習慣ニ因リ琉球國王ハ支那帝國福建省
ノ首府タル福州府及ヒ支那帝國中其他ノ地ニ
毎歲欽差使臣ヲ派シテ若干ノ貢稅ヲ納レ依テ
以テ支那ヨリ右琉球國王臣民ニ福州府ニ至リ
貿易スルノ自由ヲ許ルシ

日本皇帝陛下ノ政府ハ甲國若シ乙國ヲ併合ス
ルト虽モ右併合セラレシ乙國ノ境内ニ在テハ
其併合ノ時ニ方リ乙國ノ丙國ニ對シ負フタル
義務ヲ叙放解除セサルノ大則ヲ遵守シ依テ千
八百 年 月 日ニ日本帝國ノ京城東京ニ
於テ調印セシ琉球國併合ノ約書ニ詳明ナル如
ク 年 月 日ニ當時右琉球國
王ニシテ方今右東京ニ住スル華族ノ請願
并ニ議諾ヲ以テ右琉球國王ヲ日本帝國ニ併合
シタリト虽モ方今日本帝國ノ一分タル右琉球

國ヲ日本帝國ニ併合シタリト雖モ方今日本帝國
國ノ十分ツ右琉球國ノ旧來ノ定慣ニ因リ是
レ迄支那ニ對シテ負フタル義務ヲ釈放免除ス
ルヲナカル可キハ猶千八百五十五年三月九日
米利堅大統領ノ布告セシ米國トノ條約ニ因リ
右琉球國ノ負ツタル義務ヲ釈放免除セサルト
同シキ旨ヲ日本皇帝陛下ノ政府ニ於テ確認シ
而シテ右貢稅ヲ支那ニ納ムル時ハ前文記スル所
ノ日本支那兩國ノ條約箇條ト抵触シ支那ニ於
テ必ス其貢稅ヲ納メシメント為ス時ハ右兩國

間ニ紛糾故障ヲ生スル原目タルノ恐アリテ
然ルニ南臺灣生蕃地ト稱スル臺灣島中一部分
ノ人民千八百七十一年十二月 日、日本ノ琉
球屬民五十四名ヲ虐殺シ
依テ同治十三年三月廿六日支那總理衙門ヨリ
日本皇帝陛下ノ外務卿ヘ宛テ贈リタル照會文
ニ詳カナル如ク嘗テ日本皇帝陛下ノ使節副島
ト右總理衙門トノ口約ニ循ヒ日本皇帝陛下ノ
政府右臺灣南部ノ人民ニ欽差ヲ遣ジ
然ルニ支那皇帝陛下ノ政府ハ右ノ地方ニ政令

ヲ設クルヲ怠リシニ曰リ右地方人民ノ景状野
蕃ニ類似シ依テ以テ其人民右日本欽差ノ護衛
兵ヲ襲撃シ日本皇帝陛下ノ政府右地方ノ人民
トヲシテ交戦ノ景状ニ至ラシメ
右ノ模様ニ曰リ日本皇帝陛下ノ兵已ムト得
ス右地方ニ據リテ之ヲ鎮定シ之レカ為メ日本
皇帝陛下ノ政府ニ五百万弗ノ費用ヲ懸ケシメ
又支那皇帝陛下ノ政府ハ右地方ノ臺灣島中ニ
在ル支那ノ藩屬地ト其境ヲ接スルニ曰リ一外
國ノ右地方ニ據ルヲ好マス右地方ヲ以テ特ニ

確然ト支那帝國ニ併合スルヲ欲シ

又日本皇帝陛下ノ政府ハ支那ト親睦ナル交際
ヲ保持スルヲ欲シ

而シテ日本皇帝陛下ノ兵ヲシテ其方今占據セル
臺灣島ノ一部ヲ退カシムル時ハ右兩國親睦ナ
ル交際ヲ固ウスルノ良法タルヘキニ曰リ
依テ今日本皇帝陛下ノ政府ハ右ノ如ク方今日
本兵ノ占據セル臺灣島中ノ一部ヨリ其兵ヲ退
ケ且ツ其一部ノ地方ヲ特ニ確然ト支那帝國ニ
併合スルヲ諾シ

之レカ為ノ支那皇帝陛下ノ政府ハ右ニ記セル
如ク日本ヨリ右臺灣生蕃地ニ兵ヲ出シタル費
用ノ五分三ヲ日本皇帝陛下ノ政府ニ償ヒ又右
臺灣生蕃地ハ後文ニ記スル如ク支那ノ律法ニ
循ヒ此ニ確乎タル政令ヲ設リ可ク且ツ日本ノ
琉球屬民支那皇帝陛下ノ領地内ニ於テ通商ス
ル時ハ支那皇帝陛下ノ官吏ニ貢税ヲ納メシ從
前ノ旧慣ヲ廢シ之ニ代ヘテ前ニ記スル所ノ兩
國條約各中税則ニ記セル海關稅ヲ納レ而シ其
海關稅ハ右兩國條約各ノ箇條ニ循ヒ日本ノ琉

球屬民ノ通商ノ為メ入ラント欲スル支那ノ開
港場ニ於テ定則ニ循ヒ之ヲ納ム可キヲ契約ス
此所ニ特ニ一條ヲ掲ケテ日本出兵費用ノ五
分三ヲ償フヘキ方法ト場所トヲ定ムヘキコト
此所ニ特ニ一條ヲ掲ケテ支那ニ於テ臺灣蕃
地ニ政令ヲ設ルル方法ヲ定ムヘキコト
此所ニ特ニ一條ヲ掲ケテ日本兵ノ蕃地ヲ退
クヘキ方法ト期限トヲ定ムヘキコト

千八百七十四年十月十七日北京ニ於テ謹呈ス

チャールズ・ダブリュー・レゼンドル

全權辦理大臣大久保利通閣下

ト号

第十二號

千八百七十四年十月二十三日

北京

閣下

今月十八日ノ談判ニテ逐件余カ先日閣下へ呈
セシ書状ニ後來ヲ推察シテ申レ送リタル如ク
大抵皆終リタリ然レトモ十九日ノ午後衙門ヨ
リ来リレ書翰ニテ兼テ此談判ノ速カニ満足ナ
ル決定有ラント衆人ノ希望ヒレ念モ忽チ結果
タリ衙門ノ書翰ノ趣ニテハ支那人ヲシテ日本

ヨリ請へル償金ノ望ヲ協フルニ至ラシムルハ
極メテ難カル可キハ疑ヲ容レスハルト氏ハ掌
テ余ニ此事ニ就テ隔蔽ヲ為サリシナリ虚カ實
カハ知ラサレトモ其切迫ナル請ニ依テ衙門モ
稍ク開拓ノ基本ト為ル可キ金ノ中ニ謝金ヲモ
合セ入レレトテ承諾セシハ僅カニ近日ノ事ナ
リ然レトモ征討ノ師ヲ送ル可キ權理ハ日本ニ
於テ有ル可カラサル旨ヲ主張レテ仮令何様ニ
金ヲ出ストモ出師ノ費用ヲ賙補スル償金ト見
做ス可カラス唯瑯瑤ノ近方ニ家屋ヲ建テ道路

ヲ造リシ等ノ如キ進善ノ事業ノ償ヒカ若シク
ハ此度ノ事件ニ從軍セシ兵士及ヒ牡丹社人ニ
殺サレタリシ人々ノ親屬等ニ分配ス可キ為メ
ニ支那帝ヨリ好意ヲ以テ与フル謝金ト見做サ
ル可シ此仕方ニテ日本ヨリ出使ノ支度及ヒ之
ニ同伴スル軍兵ヲ支給シ又台湾ヲ引拂フ等ノ
損失ニ就テノ要求是非トモ取除カル可キヲ
要スト云ヘリ

翌日大久保氏再ヒ支那諸大臣ト出會有リ同氏
ニハ余カハルト氏ト會談セシ趣ヲ預シメ通知

之置キタリトナリ此應接ニハ彼等ハルト氏ノ
示セシ仕方ニテ日本ニ償ヒテ為サレト欲ス
ル由ヲ言フト垂トモ專ラ意ヲ用ヒテ金高ノ數
ヲ言ハス唯言ヲ巧ニシテ云フ貴國ノテ費用セ
シ金高ハ余輩既ニ之ヲ洞知セリ今爰ニテ之ヲ
言ハレトハ無益ニ屬スト云ヘリ又大久保氏ニ
心得トシテ云フ仮令ニ條約決定スルニ至ルト
モ余輩ハ末々之ヲ本條約ニ組入ルハ得ス余
輩カ今保合シ得ル所ハ唯言語上ノ約ニ且此
約ト垂トモ日本軍兵ノ台地ヲ引拂ヒシ後ナラ

テハ断然トフルヲ得難シト云ヘリ因テ大久保
氏ヨリ論シ云フ余何程支那ヲシテ辱名ヲ負
ハシノサレト欲スルトモ貴大臣ノ請フ所ノ
如ク格外ノ勸安ヲハ為シ難シト云ヘリ然レト
モ大久保氏ハ蓋シ支那諸大臣ヨリ十分ニ支情
ヲ聞カレヨリハ其実情ノ在ル所ヲ洞悉セシト
欲セル意有リケレハ翌日鄭氏ヲ衙門ニ往カシ
メ結末ノ對談ノ下懸合ヲ支那ノ下官負ト為サ
シメレトノ請ヲ許ルセリ但シ結末ノ對談ハ二
十三日ト約セリ

鄭氏衙門ニ到リ公ノ承諾^詩ス可キ金高三百万弗
ナリト云フヲ話セシ時彼等大ニ驚愕シテ支
那ヨリ出ス可キ金高ハ多クモ三拾万弗ヲ以テ
相当ト為ス可シト思ハルモ之ヲ應恭親王
ニ申し談ス可シト云ヘリ大久保氏之ヲ聞テ大
ニ怒リタレドモ自ラ顧ルニ戦争ノ使節トシテ
来リレニハ非ス唯和平ヲ謀ル為ニ遣ハサレシ
者ナルヲ思ヒ忍テ日支関係ノ事ノ結末迄待サ
ルヲ得スト決心シ明日ノ談判ノ上ト專ラ之ヲ
待テ居タリ

午後北日耳曼ノ公使余ヲ招ケリ彼ノ話ニ依テ
思フニ総理衙門ハ固ヨリ一定ノ見無キ故ニ大
久保氏ト平和ノ談判ニ及ビシト虽トモ全ク戦
争ノ用意ヲ為ス可キノ急務タルヲ思ハサルニ
非ラサルヲ必セリ。彼等此公使ト近頃會談セシ
時彼ニ甲鉄船二艘ヲ請ヘリト云フ此事及ヒ公
^使之ニ答ヘタル言其他從來信用スルニ足ル可
キ支那人ヨリノ風説ノ一二ヲ併セテ余カ覺書
四十壹号ニ録載セ置ケリ其写各一通別紙ニ記
シテ呈進ス(別紙一号ヲ見ル可シ)

今日大久保氏ト總理衙門ト結末ノ應接有リ此
ニテ表向キ談判ハ終リタレトモ余カ見ル所ニ
テハ不日ニ又^會談ノ莫有ル可シト思ハル、ナリ
ウエトド氏ノ言想ト合ハス可シ後令以此莫有リ
氏且大久保氏ノ日本飯國ニ次テ重キニ破和ノ
莫有ルニモセヨ同氏当地^遼遼ノ間ニ得タル信
用ヲ減ス可シトハ思ハサルナリ其任タル最初
ヨリ極メテ困難ノ事ニテ有リシナリ始メ東京
ヲ^出發セシ時ニ台湾ノ征師ハ世間其莫情ヲ知ラ
サル者ハ猶全ク戦備ナキ有様ナリシ支那ニ對シテ既ニ頗ル其

用意有ル日本ヨリ戦争ノ端ヲ開ク者ト思ヒタ
ルナリ然ルニ日本ニハ却テ然ル者ニ非リシ故
ニ日本ヲシテ^方無キ有様ト為セリ何トナ
ルニ支那ヨリ大軍ヲ以テ日本地ニ攻入ル可キ
用意整ハカル前ニ此方ヨリ送殺キレテ纏カニ自
國ヘ差向ケラレントスル軍兵ヲ止メ得レ程ノ
莫ナレハナリ北京談判ノ詳細ハ言ハス且余カ
心中ニ確定ト思ハサレ莫實ナレハ再ヒ挽回ノ
應接有ル可キ莫ハ保シ難ケレトモ余思フニ此
談判ニテ日本ヲシテ其困難ノ地位ヲ脱セシメ

且開化諸國ノ承認セル万国公法上ノ義務ヲ守
リテ所作ノ自由ヲ得サレバタル者ト謂フヲ得
可レ殊ニ困難ナルハ日本並ニ支那ニ在ル英國ノ
公使等事ヲ英國ノ商業ヲ保護スルノ意ヲ以テ
余カ書状第十号ハ中ニ別載セルウエーアド氏ト
トマレ氏ノ會話ノ旨趣書ヲ見ル可也

万隻ヲ置テモ和平ヲ持マ可キ意ヲ見ハシ之カ為ニ其一人
ウエーアド氏現ニ戦争起ラハ英國之カ仲入ヲ為カレ
フ云ヘリ同氏大久保氏ヲ招ヤラ此度ノ事件ニ就テ唯一方論
ヲノミ聞居タルヲトハシ之フニ説シテ其解ヲ請問

ト且何レカ曲何レカ直ナルヲ見テ直ナル方ヘ
左祖シテ助カセント云ヒシニ大久保氏非常ノ
才能ヲ以テ公使ニ向テ其總理衙門トノ談判唯
日本ト支那トノ間ノ面目ノ事ニ関スル内ハ直
ニ此事ニ預カレル人ノ外ハ別ニ他人ヲシテ与
聞セシムルヲ得スト云フヲ明了ニ言放チテ
此難ヲ遁レタリ然レトモ又云フ此事件決定次
第早速其趣ヲ報告ス可シト云ヘリ尔後此事ヲ
報告ス可キ時刻リシ時英國公使大久保氏ヨリ
ノ報告ニ依テ日本人台湾ヲ引拂フノ約定尤モ

ナルヲ承知セリ此時ヨリ以來若シ公使ノ仲
入スルヲ有ラハ必ス日本ノ為メニスルヲナル
可シト云フ明白ト為レリ此ハ日本ヨリノ請
ニテ為スニハ非ラス支那ノ執迷不正ノ故ヲ以
テ英國ノ利益ヲ保護スル為ナリ故ニ支那ニテ
若シ此等ノ約定ヲ承諾スルヲ拒ミ戰備ヲ為
シ日本ニ向テ不正ノ要求ヲ為スヲ主張スル
ナラハ日本ハ自己ヲ守護スルノ權ヲ以テ支那
ニ抗スルヲ得可シ此時ニ及ハ、支那ハ必ス萬
國ノ憐マサル所ト為ランヲ必然ナリ

其他大久保氏カ談判ノ好成果ト謂フ可キトハ
支那ニテ余輩カ最初北京ニ到リシ時ヨリ戰爭
ノ準備更ニ嚴ヲ加ヘス支那ニテハ大久保氏ノ
兩國ノ間ニ粗暴ノ戰端ヲ開カサラント周密ナ
ル用心ヲ日本ハ何様ニモ戰爭ヲ遁レントスル
ノ意ナリト推察セシ故銳意ニ戰備ヲ為ス可キ
最中俄カニ其準備ヲ緩ルメタリ就中福州ノ總
督ニ六百万弗ノ借金ヲ約定ス可キ免許ヲ與ヘ
ス(書狀第十号ヲ見ル可シ)又多分ニ軍兵ヲ募集
スルヲ彈メタリ日本若シ大久保氏東京へ歸

著ノ頃兵備既ニ整ト有ラハ直チニ戦争ノ布告
ヲ為スモ可ナリ当使初メ支那ニ向テ出發セシ
時ヨリ今猶別ニ強ヲ加フルヲ見ス決シテ其怒
レ有ル可カラス

大久保氏ハ今月二十六日ニ支那ヲ去ラン
告ケタリ余ハ自分ノ出發準備ヲ為シ居レリ支
那若シ大久保氏ノ決意ニ動カサレテ來テ異論
無ク同氏ノ要需ニ從フニ非サレハ二十五日ニ
ハ出發セント欲スルナリ

藩地事務總裁

大隈重信閣下

レゼンドル

覺書第四十一号

昨日セバロンドホルレベン氏余ヲ招キテ左ノ
事ヲ告ケタリ支那人同氏ニ請ヒテ日耳曼帝其
國ノ甲鑛船二艘ヲ支那へ賣渡シ呉レ可キヤ否
ヲ聞キタシト云ヒシニ同氏ノ答ニ日耳曼帝ハ
他ニ賣ル程ノ甲鑛船ヲ所持セサルハ言ニ及ハ
ス猶其餘ヲ建造セシム可キ命ヲ下シタリト云
ヒシトノナリ

午後余カ住スル寺ノ僧ヨリ聞タリシト云フ人
ノ話ニ聞ケルハ支那人ハ償金三百五十萬弗乃

至四百萬以下ニテハ日本ニテ満足セサル由ヲ
聞シカハ断然償金ヲ出サ、ルヲニ決意セシ趣
ナリトシ此僧ヨリ聞ケル訖ハ鄭氏カ総理衙門
ニ對談セシ時ヨリ以前ニ聞込タル者ナルヲ明
白ナリ故ニ此金高ハハルト氏ヨリ彼等ニ告知
ラセシヲ知ル可シ蓋シ同氏ノ意ニテ余カ同氏
ニ告ケシヨリ餘分ノ金高ヲ云ヒシナル可シ
余又左ノ事ヲ聞ケリ明日ノ應接ニ於テ彼等又
日本兵ノ台湾ヲ引拂フ可キ事定マリテ然ル後
現今日本トノ紛紜ヲ緩和ニ談判ス可シトノ約

ヲ以テ專ラ此事ヲ請フナル可シトナリ又聞ク
サレトモ戦争ヲ遁レント欲スルカ故ニ曩時台
湾蕃地ヲ征服セントセシ頃遂ニ其志ヲ得ス因
テ蕃地ヲ征領ト為ス事ハ成シ難キ者ト思ヒシ
故ニ次テ日本ヨリ之ヲ成セシハ當然ノ理ナリ
ト云フヲ正直ニ承認スルヲハ日本ヲシテ台
湾ヲ引拂ハシムルヲ得サル時ニハ失策ナル
可シト議シ居レリトナリ又聞ク支那ハ日本ヲ
好意ノ隣國タル可シト信セシ故ニ最早日本ノ
台湾ヲ扱有スルヲ拒マサル可シトノヲナリ

余カ見ル所ニテハ若シ支那此意外ノ申出シヲ
承知スルニ至ルナラハ日本ニテハ之ヲ約定ノ
基本トシテ承許ス可シ但シ支那ニテハ和親開
拓境界ノ條約ニ依テ日本ノ台灣蕃地ノ権理ヲ
全ク承認シ直テ一軍ヲ解キ兵ヲ弭メシム可シ
今明白ニ支那ノ戰備ハ專ラ日本ニ對シテ用意
ス此事ノ引續ク間ハ此國ノ為メニ用意[×]此事
[×]引續ク危害ヲ為スナリ是余カ覺書第三十六
号ニ説明スル如ク正當完全ナル戰名ノ故ト為
ル可キ者ナリ

余知ル今日佛國公使ノ總理衙門ニ往ケルハ日
本事件ヲ談スル為メニハ非ラス帝ニ暇乞ノ謁
見ヲ請フ為メナリトソ

千八百七十四年十月二十二日北京

カゼントル

日本弁理大使

大久保利通閣下

我輩去リシ後総理衙門ヨリ御聞キ相成候事ア
 レハ何莫ニテモゼ子ラレレゼンドル承知致シ
 置キ度候ニ付キ別段使ノ者ヲ以テ此儀申進候
 也使ノ者ハ明日午前十時頃ニハ歸リ可申ニ
 付キ夫マテハ我輩此地ニテ相待居候大久保殿
 ノ為ニ舟船用意ハ盡ッ出来致居候
 此使ノ者ハ直ニ御差戻被成候様有之度モ子ラ
 レレゼントル申居候

十月廿六日午前十時通州ニテ

ジョンベットマン

福原様

返答口上覚

只今食事中ナリ且ツ一時半ニハ當地出立可
致ニ付キ使ノ者ハ直ニ帰シ申候

寫

ミストルウエード昨日午後大久保殿旅館ニ来
訪シ今暫ク猶豫シテ支那受府ニ萬ト勘考セシ
メントノ頼ミアリタルニ就キ大久保殿直答ア
ラサソシガ思按被致候昨夜^後深更ニ英公使館ニ
被至午後四時マテノ猶豫ヲ與ヘ支那受府ヲシ
テ勘考セシメント被申タリ愚按ニ支那政府必
ス其論ヲ主張スルヲ止ムヘケレトモ三百万ヲ
拂フノ事ハ為サハルヘシ
右之意ゼ子ラレレゼンドル江却通達可被下候

十月廿六日

福原

ピットマン様

私儀明日ハ天津マテ下向可致候

寫

貴君當地御退去ノ後ミストルウエード支那要
府ト大久保殿ノ間ニ周旋シタルニ付キ明日総
理衙門ニ於テ再度會議可有之ナレハ支那日本
ノ議論無事ニ相済可申候就テハ私事使者トシ
テ三十一日ノ郵船ニテ日本へ帰朝可致間支那
陸兵ノ模様私マテ御報知有之度候

十月廿七日北京ニ於テ

福原

ピットマン様

別添一通雅ニテモ宜敷候間日本人へ御渡可

被下候

私儀明日午後カ明後日早朝当地出立陸路天津へ下向可致候

第 十三号

愚書第十二号ニ申進候如ク私儀本月廿五日午後二時北京出立八時ニ通州江着致シ其後承候ニハ其夜間大久保殿トミストルウエードト相談有之竟ニ支那政^府ト再議ニ及ビ候由斯等ノ事モアラシクカト兼テ推察候故翌日十一時マテ通州出立ヲ見合セ同伴ノミストルボツトメシニ頼ミ手紙ヲ認メ福原氏マテ事ノ様子ヲ尋遣セシニ使之者口上ノ返辞ヲ聞キ歸リ候其返辞ニ云大久保殿通州江出立相成ラントス午後ニハ

來着可相成ト此返辭承テ私儀ハカナクモ通州
出立致候

然レニ私一昨日当地ニ着シピットメンヨリ福
原ノ書状ヲ送傳致来リ又昨日一書送傳致来リ
之ヲ見候節ハ大悦不堪雀躍御推察可被下候右
ニ通之書ハ寫ヲ封入仕候間御覽可被下候是ニ
於テ私儀ハ天津ニテ福原ノ到着ヲ待テ進退可
致ト決定仕候

唯令(十二時)北京ヨリ確報来リ本月廿八九日頃
ニ大久保殿マテ支那政府ノ夫答アルヘキ音通

知有之候

從來北京ヨリ日本官人ニ托シ出ス所ノ愚書公
私ノ別ナク一切郵送不致シテ日本政府及ヒ在
日本之我友人之カ為ニ六個月間私之音信ヲ聞
ク能ハサルニ至レリ(私北京ヨリ魯西亞總領事
ハ一書ヲ送候処同人ヨリ返書有之其返書封入
致置候因テ前文之次第相分可申也)次之蒸氣船
便ニテ此大封之書ヲ閣下ニ呈シ且ツ其時マテ
ニ北京ヨリ傳承之儀モ有之候ハ、御通告可申
上候

昨夜大久保殿マテ一書進呈致候字封入致置候
間御一覽可被下候

十月三十日天津ニ於テ

チャールレスウレゼンダ

番地事務総裁大隈重信殿

佛文書管譯

貴下御惠贈之御書查收不取敢貴報申上候尤右
ニ就而者定而御疑惑可有之ニ存候得共貴下御
送致有之候去ル九月十二日附之貴答一昨日稍
致查收候次第ニ而惣計四日間何之地ニ遲滯
イタシ居候儀ニ或甚以暖昧候得共多分者スコ
一ノ海路ヲ經テ相達候儀ニ致想像候就而者貴
酬古様遅履^緩候者全小生過失ニ出候儀ニ
無之段御高察相願申候
今回世上一般致着目候日本支那西國事件景况

ニ付定而貴下ヨリ御音信モ数回可有之ニ愚考
仕候得共前文不都合之事件ニ付不違之向モ可
有之矣以遺憾至極ニ御座候

貴下北京表長々御滞在ニ付而者荆妻所願之事
件之成否并御承諾之鍊化石之儀如何可相成哉
ニ致掛念候

日本使節御同行ニ而不日御帰途ニ御待申上候
若天津表一時御滞留候ハ拙宅御用ニ供度候
間必然御立寄相願申候莉書石宜敷可申上候様
申出候恐々教白

於天津一千八百七十四年十月二十四日

ルウアエベル手記

寫

私北京出立之後總理衙門再議ヲ計リ候儀有之
タ事ト推察候間通州へ出立之儀十八時間猶
豫致夕八時ニ通州へ着シ態々ニ使ヲ馳セ一書
ヲ福原氏へ送り事ノ模様ヲ報シ吳侯様申遣シ
候處翌朝十一時ニ其使帰来リ福原氏ヨリ口上
之返辞アリテ閣下將ニ北京ヲ御出立ナサレ干
後ニハ通州江御着可相成之由承リ候故断然意
ヲ決シ遲々ナク天津ヲ指シ出發致當地へ着候
處福原氏ヨリ「ミストルベットメン」江報告相成

候意ヲ承知致因テ本月廿五日午後北京ニテア
リタル事ノ模様ヲ承知致候右報告之寫封入候
間御覽可被下候

私北京江引返候方貴意ニ叶ヒ候哉否不相分且
ッ福原氏明夜ハ当地ニ可被成趣来コストルベツ
トメシヨリ傳承致候故同氏ニ面会之上尚一層
之談ヲ承リ免モ角モ可致夫マテハ此地ニ扣居
候半ト決定仕候日本ヨリ申出候償金之高ニ至
テハ閣下宜ク御高裁可被為別ニ愚意無之候得
トモ次之件々無御忘却様有之度存候先ッ第一

ニハ最初ヨリ日本ノ味方致候土蕃ヲ好ク待遇
スヘキノ旨支那ノ誓ヲ取ラサルヘカラス是実
ニ肝要ノ儀ニ御座矣因テ土蕃等ヲシテ其
擁護ヲ得セシメンカ為ナリ次ニハ假令右ノ
如ク好キ待遇ヲ受クヘキ心底ナキ者アルト
モ土蕃多クハ全ク不化ノ民ニハ非スト首ルヘ
ク彼和蘭人が曾テ此島ヲ統治シタリシ頃之
ヲ數衆振起シタルカ如ク今マテ支那ニテ能
ク斯心ヲ以テ土蕃ヲ待シタリシナレハ土蕃固
ヨリ必ス外国人ヲ待スルニ無情ナラサルヘク

此土蕃ハ文明開化ノ国々ニ捨テラレス憐惜セ
ラレ、ノ價アルカ故決シテ之ヲ支那ニ委付ス
ヘカラス支那トイフ名ハ彼ノ関クモ厭フ所ニ
シテ從來ノ事ヲ思惟シテモ支那ニハ信從セサ
ルヘキナリ此一條ハ拙者ノ「イス、アブラリジナ
ルホルモサエパ」トオフゼチヤイ子スインバ
イル台湾蕃地支那版圖ト題セル小冊子ニ詳載
スル所ナリ十四丁ヨリ二十丁ニ見ユ
シヤパンメールハ常ニ私ヲ仇視スル新聞ナル
故其刷行シタル一章中ニ右ノ書ヲ全ク掲出シ

ケレトモ支那其權ヲ此土蕃ノ上ニ布キ行フ能
ハサル肝要ノ一件ヲ説キ不申候然ルニ閣下此
度ノ談判ニ此處分ヲ定ムルヲ日本ノ為ニ己ム
ヘカラサル者ト賢考アルヘキハ余ノ固ヨリ信
スル所ナリサレハ日本ハ安心シテ各國ノ交
際ヲ司トル官公使使節等ヲ招キテ味方ト為スヲ
得ヘシ是ノ如クナレハ余ノ満足スル所ナリ去
ル八月二十一日上海ニテ「ミストルボアソナ」
デト余トヨリ閣下ニ呈シタル別段ノ案書中ニ
述ヘタル所ト同シ盟約ヲハ支那ニテ聽ユルスカ又

ハ土蕃ヲ開化スルノ業ヲ外國ノ引請人ニ
托スルカ此ニ件ノ外ニ出テス然ルトキハ日
本人一名亦必ス其引請人中ニ加ハリ因テ支
那ト諸外國ノ間ニ取結ビタル別段ノ約束ニ
從ヒ支那ノ外國運上役ノ如キ用ヲ為スヘシ
何レニカ此類ノ事ナシニハ^ハホルモサ^レノ一條決
シテ無事ニ治マラサルヘク此度日本ニテ決
行シタル如ク外國ヨリ手ヲ下スヘキ事件又々
遠カラスシテ再ヒ起ルニ至ルヘシ

亞國公使ハ數日前ニ天津ヲ出立シテ北京

ニ進向シ香港上海ノ銀行頭取ノ出頭^ミス
トルホルベス^レヲ同伴セリ惟フニ其意ト支
那ニ金ヲ貸ス^トヲ再議スルニ在ルナリ
[「]オリイ^ンタルバンク[」]ノ執事[「]ミストルロベル
ツオ[」]シモ亦次ノ郵船ニテ來ルベシ其意蓋
シ亦前ニ同シト云
扱此書ヲ急速ニ差出シテ閣下ノ御答書ヲ得ン
カ為ニ魯西亞ノ総領事ニ議レ使賃ハ歸後ニ相
拂フ^トニ取極メ其小使ヲ借リテ為持差出ス所
ナリ謹言

千八百七十四年十月廿九日

於天津チャールス、ウ、レゼンドル

辦理大臣大久保利通殿

り号

本月三日大久保大使天津ニ着シ同日午後李
鴻章ヲ訪尋シ西氏ノ應接互ニ丁寧ヲ旨トシ
テ大ニ喜悦ヲ催シ日暮ニ至リ宜然トシテ別離
ニ相及バレ翌四日未明頃ヨリ使節ノ連中一同氣船
アツピン^ル号ニ乘シ天津出発相成候拙者本月
二日附ノ電報ニテ申進候通り拙者儀ハ辦理
大臣大久保氏ニ隨行可致答ノ蒙^テ芝罘ニ^精致
シ候折不斗勦考イタシ今ヨリ毫モ御益立
申ス可キ事件モナク政府ノ巨大ナル費用モ顧
ミバ尚ホ大久保大臣ニ隨行致候儀無益ノ至リト存

シ候間是ヨリ大久保氏ニ分レ此度大久保辦理
大臣ヨリ三條閣下ニ呈スルノ信書ヲ携工帰レル
官吏福原氏ニ同導シ直キニ黒田号ニ乗シ六日本
ニ帰朝スベキ旨ヲ相談ニ相及候處大久保大臣
之レヲ承引シ拙者共本月六日午前六時頃芝罘
ヲ出発シ四昼夜廿一時半ノ航海ヲ歴今ノ日
一時頃東京灣ニ帰着致シ候

去ル十月三十一日北京ニ於テ假条約取結ノ上
高議一決相成候大久保使清ノ決局當月二日ノ電
信ヲ以テ御通シ申上候小報ニテハ定メテ閣下盡ク

御洞知難相成ト奉存候爰ニ日本ノ羸捷タル再
議ヲ催シテ清國人々大久保使清ノ圖計ニ承服
致シ候儀實ニ當國ノ面目ヲ施シ満足ノ至ニ
候此ノ度英國公使ハ高議ノ始メニ於テ大久保
大使ノ決議ニ及ブハ勢其ノ功業ヲ奏ス可キ
意見ナク迎モ西國ノ内乙ハ(支那)甲ノ(日本)
請求ニ應スベク決セル旨ヲ甲ニ報告スベク
敢テ西國ノ親友ニ歡解スルナキカ如シ又假条
約ニ鈐印シテ自然再議ノ功驗ヲ奏セシハ其ノ裨
益少シトセス且昨年總理衙門ト副島氏トノ

談話ニ據リ日本ヨリ兵ヲ臺灣ニ出セシ權利
ハ暫ラク臺灣土蕃ノ土地ヲ領シテ日本ヨリ消
却セシ費用ニ引當テ金額四十万テールヲ償却
セシメ又清國ヨリ琉球國ノ請求ヲ止メルハ牡
丹人ノ為メニ殺害ニ逢ヒ始メ牡丹人ハ之ヲ日本人
ト云シ薄命ナル人ノ券族ニ金額十万テールヲ
償セシムルニ足ル

此ノ度假條約ニ照準シテ償却相成候
金額ハ曾テ清國ヨリ都督西郷氏ニ臺
灣ノ地ヲ立去ルニ於テハ其ノ償可致

旨云送レル赴ト異ナルナキハ定テ閣下御承知
可有之存候右金額拂方之儀ハ假條約中ニ記載
無之候得共福建ノ地方會計掛ト北京政府ト示
談相成候間福建之地方會計掛ヨリ償却可致候
此旨變議ニ相及候ハデハ大久保氏北京ト福州
ノトニ關係シテ止ムヲ得ス遷延ニ繋カレ迎モ
好都合之條約取結ヒ難相成依之去月八日拙者
福州工ノ御使相果シ不申候事誠ニ遺憾之至ニ
候

俎清國ヨリ償却致候金額ハ些少ニ有之候得共

前文ニ記載候如キ假條約之名目ヲ以テ偏工ニ
日本之裨益ヲ奏セシト又臺灣ノ始計ヨリ生
スル便利トヲ併セ論スレハ實ニ日本ノ満足ト
云フベシ何ントナレハ今儻シ當帝國ニ於テ臺
灣ノ出兵ヲ完然スルナキモ海陸ノ二軍ハ九
ケ月間遠ク其ノ本国ヲ去リ他日重テ出兵スル
ニ當テ其拳動如何ヲ經驗スルニ至レル故ナリ
蓋シ此度ノ經驗及ヒ其益カハ爾來高德ナル國
君ノ標準ヲ輔助シ若クハ外國人此ノ國ニ侵入
シテ大ニ國中ヲ蹂躪スル及ブキ固ク日本之儀義

氣ヲ守リ重子テ其本国ヲ去ルノ一挙アラバ更
ニ緊重之戰場ニ臨ニテ必ス其ノ勲功ヲ奏スル
一端ト云フベキナリ謹言

七十四年十一月十日

チャーレスドブリーウレグエンドル

大隈蕃地事務局長官

閣下

蕃地事務局

年田豊譚

替地事子居

